

# 土

# 淨

號 月 一 十

昭和十年五月廿日第三號郵便物認可（毎月二回、日發行）  
昭和十七年十月廿日印刷・納本・昭和十七年十一月二日發行

第八卷 第十一號



# 陸海軍 慰問浄土 病院

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

## 白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇ 全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇ 一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇ 毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇ 個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇ 御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

總本山知恩院門跡  
淨土宗 管長  
大本山増上寺法主

郁芳隨圓猊下序・増谷文雄著  
大島徹水台

新刊

# 行誠上人

附錄  
著作解題  
年譜

## ◇明治維新の佛教界を第一線で指導した上人を語つて餘りなし◇

郁芳管長猊下の言葉

福田行誠上人は學ぶかく、徳たかく、文藻ゆたかにして、識見に秀でたお方であつて、ただに我が浄土宗の誇るべき大徳であつたばかりでなく、また近世佛教界において一際ぬきんでた巨匠であられた。いま一億心を一つにして聖戰完遂に邁進すべきの時、上人の學徳に接して吾等が信仰の策勵に資することは誠に意義深いことである。

大島法主台下の言葉

上人は氣品に於て、氣慨に於て、極めて高く、卓犖曠世の風があり、俗韻を厭はれた。維新當時の廢佛毀釋の滔々たる奔流の中にあつても高勁の態度を持せられてをつた。現代が行誠上人の信仰と行蹟に學ぶべきものは極めて多い。その一斑を窺ふだけでも現在の僧侶はもとより、一般人士にとつて裨益するものあるを疑はない。

著者曰く……

近世第一の高德行誠上人の全傳を執筆するに際し、私の禿筆が上人の高徳を汚すことの少しでも少かれと希ひました。しかし明治の維新の渦中に立つて毅然として佛僧のゆくべき方途を誤らなかつたこの上人の芳躰は、第二の維新といはれる今日の激動の中に立つたたくしどもに、特に教ゆるところ大ならざる筈がありますまい。

B 6 版二百廿八頁

寫眞五葉入り

定價一圓五十錢

送料十、二錢

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園十五號地  
振替東京八二一八七番

# 淨土十一月號 目次

表紙・扉・目次カヅト

河村良孝

聖典  
講義

生活性をもつた戦果

大野法道 (四)

隨筆  
子

供の躰

石井俊瑞 (三)

内面の世界に生きて

吉田絃二郎 (一〇)

法語  
感話

父を讃へた近江商人

伊藤宏天 (一四)

劍法

の奥義

林東軌 (一八)

座蒲團の教へ

吉水辨道 (三)

二宮翁の叱正  
淨土宗鍊成要項

(三) 蠅蟲の猛威  
(五) 先づ國債だ(漫畫)

(三) 蠅蟲の猛威  
(六) 先づ國債だ(漫畫)

隨筆中

將姫物語

高橋良和 (八)

▼信

仰相談▲

中村辨康 (四)

小説若

い父

一瀬直行 (六)

佛典  
童話

金の鹿

濱野義光 (二六)

歌俳

壇……岩野喜久代選 (元)  
壇……太田耳動子選 (四九)

笑話……これは便利 (一九)  
會のたより (二五)

漫畫 鍊成道場……漫畫協團 (四)

笑話……これは便利 (一九)  
會のたより (二五)

法爾 自然の死生觀及宗教觀

中村辨康 (五二)

編輯 後記

(五)

善導の釋を拜見するに、滅空が  
目には、三心も南無阿彌陀佛、五  
念も南無阿彌陀佛、四修も南無阿  
彌陀佛なり。

法然上人御法語



淨土 十一 月 號



歎 佛 偈 講 義 ……七…

聖 典 講 話  
生活性をもつた戦果

大 野 法 道

布施調意・戒・忍・精進

是の如く三昧と智慧とを上れたりとす

これは第九偈である。この前の第八偈から後の十一、十二偈までの五偈は、阿彌陀佛の前身である法藏菩薩が、佛の佛たる所以、つまり佛格の成就を願ひ求められる心を説かれたものであるが、その中、この第九・十の二偈は佛となるべき基因の行、即ち菩薩行が説かれるのであり、第十一・十二の二偈はその行の旺盛さが告げられるのである。こゝに忘れてはならない重要なことがある。それは法藏菩薩が師の佛の尊い功德に感激して、それをわが身に具へることを願ひ求められるに當り、たゞ佛のことだけを挙げずに、佛徳の由て来る基因の行に目をつけて、しつかりと

それを行じ抜くとの決意を固められたことである。

結果を望む者が、その基因をつかむのは最も大切であり、その願求の眞實なるを保證するものである。もし、結果の見事なのに心を引きつけられて讃歎するが、その見事を顯はし出す基因について、思ひを凝すことが割合に少いやうでは、本當の讃歎にはならぬであらうし、見事な結果も、遂にたゞそれだけのものに終るであらう。

大東亞戦争の開始以來、皇軍が顯はした驚くべき大戦果に、われわれは感激し感謝し、それを讃歎することに心の限りを盡してゐるが、それと同時に深く思ひを、その由て来る基因に凝すべきである。前線の將士の艱難辛苦、お國を脊負ふて前進する勇猛、それどころか「醜の御楯」たるの自覺、平素——まつたく三百六十五日の平素から、火

も發せんばかりの硬鍛鍊、はち切れんする士氣、世界に例なき嚴正なる規律など、まことに淨土の教へに言ふところの「平生業成」の結果なるを思ひめぐらし、將士に具はる日本人の眞の姿を、そこに確認せねばならない。

かやうに戦果の基因が、しつかりと心に懷かれる所には、戦果が生活性を持つてくる。生活性をもつた戦果は、たゞ從來に顯はれた事跡だけに終らずして、これから先、將來へかけて續々と連り、事あるごとに、それからそれへと實現し來るに相違ない。

生活性をもつた戦果は、武力戦に止まらずして、經濟戦にも思想戦にも、形を變へて顯はれてくる筈であるから、之こそ實に大戦果であり、大東亞共榮圈建設の要道ここにありと信するのである。

法藏菩薩が佛を求めて、佛の基因の菩薩行を確把することにより、遂に佛をわがものにせられたやうに、われ／＼は亦、日本人の眞の姿を失はぬことによつて、赫々たる戦果をわがものにせねば止まないであらう。

## 二

第九偈は菩薩行の首班となるもので、普通には六波羅密とも、六度の行とも言ふ。施・戒・忍・進・定・慧の六つ

である。之は廣く大乘佛教の經文には到るところに説かれてゐる、佛道の標準である。

今、六波羅密の一々について語るべきであるが、既に六月號の「逞しい大國民の行」の中、五つの行（戒・聞・精進・三昧・智慧）を述べた時に、戒・精進・定（三昧）慧の四つは済んでゐるから、こゝでは施と忍について話すことにする。施は多くの場合に布施といふ。日本では坊さんにお經を讀んで貰つた時のお禮を、布施といふ習慣になつてゐるが、もとは施を布く、廣く施すことで、施の大なるものであることを表はす言葉である。種類を分けると、財施、法施、無畏施の三とほりの施がある。

日常生活に事缺いて困る人のために、物に餘裕のある人、餘裕がなくとも、わが身を切りつめてまで、さうした人に物資を施すのが財施である。之には個人でやるのもあれば、諸の救護施設の如き社會事業でやるものもある。菩薩は衆生の中に自己を見るから、困る人を見て、知らぬ顔では居られないのである。

財施に關連していたく感ずるのは、食糧に對する飢鬼にも似たらん有様である。今少し施の心を持ちたいものである。或は人によつては、この戦時下にそんな暢氣なことを

言つてゐたのでは、皆他人に取られてしまふから、何でも多く手に入れるのだと言ふかも知れぬが、それは困苦を厭ふて、しかも自ら困苦に拍車をかけてゐるのである。さうした個人主義が作り出す世界と、一億同胞の大きな施の心から顯はれる世の中と、いづれが樂に暮せるかは言ふまでもないであらう。げに憎むべきは米英式の個人的な我利主義である。

法施となるともつと廣くなる。之は困つてゐる人に、困らずともよい道を開いてやることであるから、他人のためによきやうに取り計らふことなら何事も法施である。もとは正しく信仰の導きをすることであつたが、その精神はあらゆる人助けの手をさしのべることである。社會施設でいふと、授産、防貧、職業指導などの事業がそれであり、感化事業や司法保護事業なども法施の部類に入るであらう。

### 三

困つてゐる人に、困らずともよい道を開いてやる法施について、最も適切なる例を滿洲國に見ることができであらう。昭和六年九月滿洲事變の始まるまでの、かの地の情勢は如何であつたか。之を内にしては古く張作霖以來の閥族の我儘な行政は、民衆に向つて苛斂誅求の重荷を負は

せ、人々の生きる方向さへ明瞭でなく、働いて得たものをもぎ取る匪賊が出沒し、人々は當てもなく苦しめぬいてゐた。また之を外にしては、絶えず北邊の彼方より侵害を受け、つゞく脅威に夜の目も樂に眠れなかつたであらう。

しかるに滿洲國が建國され、日本が親邦となつて大東亞共榮圈の一角として進むべき道を明らかにし、軍事・産業・經濟・文化、各方面の指導に當つたから、駭々として進歩の跡もめざましく、去る九月十五日には建國十周年慶祝式典が、全滿四千三百萬人の心からなる歡喜の裡に行はれ、わが日本も全國的にその喜びを共にし、かの國の異常な發展を慶祝したのである。之は日本がこゝに十年間に行じた、大なる法施の實證實例であらねばならぬ。

たゞに法施ばかりではない。日本は滿洲國に向つて少からざる財施もやつてゐる。滿洲事變から各種の出資は勿論のこと、多數有爲の人材と、活力盛んなる青年とをかれに送り、一路その開發進運のために大なる力を施與した。更に事變以來、出沒常なき匪賊討掃のために、一身をさへげられた皇軍將士の英靈は、皆これ彼の國の今日ある所以の、大なる礎石を成すものであつて、いかに日本が大施の精神に徹し、尊くもいさぎよくそれを行じてゐるかを、は

つきりと見て取ることができらるであらう。

#### 四

無畏施といふのは、人々に無畏を施與することである。

人々の持つ恐れを除いて安らかにするのである。

ところが、氣の強い人であつてみれば、自分は何も恐ろ

しいものはないから、始めから無畏だと言ふかもしれない

が、そんなのは充分にわが身を反省せしめてたゞ空威張り

の強がりと言つてゐるに過ぎぬ。本當の無畏になつてゐな

い。まづ恐ろしさを知つて、それに對して慎重に用心し恐

ろしいことが恐ろしくなくなつたのが本當の無畏である。

今現にわが國土は、いつ何時敵機が上空に現はれて、爆

彈・焼夷彈・毒ガス彈などを投下するやも知れぬ情勢に在

る。かゝる情勢に對して初めから、何も恐ろしくない。米

英の空軍などどうせ碌な空爆はできやしない、四月十八日

のあれで大體知れてゐる。それに我が軍の防備は完璧だ、

何の恐ろしい事やあると、平氣で何の用心もせず居たと

したら、これが本當に強い人と言へるであらうか。

上りの厚さのない生活ほど、脆くて危ないものはない。敵機の狙ひどころはこゝである。本當に空襲が恐ろし

くなくなるのは、まづそれを恐れることから出發する。

爆撃による生命財産の喪失、物資防備の消滅破壊、かう

した國家の損害が恐ろしくなくて何であらう。然るに恐る

べき空襲の力以上の力がわれに有るを覺知し、それに基づ

いて行動する時に、恐れが恐れでなくなつて、何物にも破

られない磐石の生活が出てくるであらう。

その力とは申すもかしこし 天皇の御威威である。この

御力は空襲などはおろかなこと苟くも皇國に仇を爲すあら

ゆるものを打ちしづめ、本來の正しい心に還らしめたまふ

絶對力であらせられる。これをかしこみまつる我々は、無

敵皇軍の大なる攻防に信頼するとゝに、各自の力の及ぶ

限り防空の知識を深め、有事の際に處すべき訓練動作を怠

らず、人事のつとめを盡す。しかも平素から持つてゐる、

日本人の不動の信念——その中には神佛を崇める信仰が入

つてゐる——を以て貫く。かくて如何なる空襲來るとも、

これには勝てるものではない。こゝに本當の無畏があり、戦

時下國民の最も強い生活がある。ひとり空襲ばかりではな

い。何の恐れもない力強い生活は、氣を付けければ判るとこ

ろの種々の恐ろしさを、先づ知ることから得られるものに

相違ない。「生死事大、無常迅速」(うか／＼とこの世を過すな)と、佛教は斷えず警鐘を打ち鳴らしてゐる。

隨筆……………

# 中將姫物語

高橋良和

いつ晴れるとはなしに、しとくと降る雨が金堂の薨をうつてほとりと筆をおとしてゐた。

晩春の名残りを秘めた古びた當麻寺は人の聲一つしない静かな晝さがりである御堂のうしろにぐつたりともたれかゝつてくる二上山も今日は煙つてうす暗い雲が南から北へながれてゐる。

今日は六月廿日氣味悪いくらひお堂に一つゆら／＼とあかりがゆれて、往來の人々の足音もどうやら絶えたらしい。

靜かに出塵の心をいだいてこの當麻寺の門をくゞつた中將姫がこの寺の金堂に參籠してからもう六日はすぎてしまつたのである。

七日の間に離縁を見出さなければこの門を出でまい、なんとかして生身のみ佛を拜めますやうに。

若き身の全身にみ佛への願ひをこめて、中將姫は金堂の丈六の彌勒像の前に、合掌禮拜する姿はあまりもいたはしかつた。

身は横佩大納言藤原豊成卿の姫として深窓に育つて、父母の寵愛を一身にうけたこの姫、

幼少の頃より誰云ふとなく心の内に芽生えた西方世界の願求を如何ともすることが出来ず又父母のゐます里をはなれ、この二上山の西麓のこの寺に足をふみ入れたのである。

合掌する姫の前にはうづ高くつまれた稱讃淨土經一千卷があつた。

世の中のうちり變る姿にこよなき佛の道にすがするために、清き心もてうつしたてまつたこのお經が姫の心をあらはすすがでもあつた。

朝から降つてゐた雨は、晝さがりから足早な雲の動きと共に西に流れて、雲のきれ目からまだ弱い夏の光が金堂の廂の間に影をうつしてゐた。

明日は廿一日満願と云ふ意味はなくても、人しれず心に決めた七日を期してのひたむきの佛への思慕を捧げるひとしきりの日が、くるのである。

假りにも、日を限つて佛への願ひをもつ人にとつては、終りが近づくに従つて、心にあせりをおぼへることがつね日ごろありがち

なことであつたかもしれない。

然しそれはまだまだ人間的な考へ方で、ひとたび佛の境界に足を入れた人にとつては、すべてをまかしまかした境地であるから、何のいらだたしさも起きてこない。

丁度、中將姫の境地は全くこの境地であつた。合掌もし丈六の佛を見上げれば見上げる程、自らの身に、金色の衣が一枚づゝ重ねられてゆくやうに一日々々佛に近づいてきたのである。

もう何も思ふことはない。

姫は目を半眼に閉ぢて、ゆれるみ灯を通して佛を仰ぎたてまつった。

静に見入る姫の眼の前に、いづくともなく入りきたつた一人の尼僧の姿、中將姫はふと眼を開けて、入り來たつた尼の姿をみつめた。

「姫よ、あなたのお願ひをかなへる方法が一つあります。外でもありません。わたくしがあなたに、阿彌陀佛の御淨土をおみせたいませう。」

この尼僧はこう語つたのである。

「はつ、ありがたう御座います。それにしても阿彌陀佛のお淨土に直におまゐりさせていただけませうか。」

佛にすがる一念から姫はこうきゝかへした。「別にむづかしいことでは御座いません。まづ馬に百駄ほどの蓮の莖を求めればよろしう御座います。」

「まあ蓮。」

「それで御座ります。泥中から咲く蓮の花、これこそ、姫の心を佛にお傳へ申し上げるただ一つの縁でございます。」

「それにしてもあの百駄の蓮を……」

「まあ、それからあとは私は如何様にもお導きいたします。」

老いた尼の聲は次第に力をこめてきた。

「まあ、勿體なや、これはきつと佛の導きで、姫の聲はとぎれた。尼の姿はもう金堂の内にない。寂靜の一瞬、姫は合掌して金堂の丈六の佛を見上げた。

今の姫には佛の相好が變つたやうに感ぜられてならなかつた。(以下次號)

## 會よりお願ひ

### 書籍御注文につき

書籍その他の御注文は必ず前金拂ひにしてお願ひ致します。書籍がお手許につき次第に代金をお支拂になるといふ葉書でのご注文は整理の上に大変手數がかかるばかりでなく間違ひ易いため、今後一切お取扱ひ致しかねますので何卒御諒承願ひます。また書籍の送料を必ずそへて御送金願ひます。

書籍やその他のご注文または會費の御納入には振替によるのが一番便利で確實です。振替用紙は郵便局にてお受取になつてお拂込み下さい。用紙不足のため從來のやうに當誌に振替用紙を入れることが出来なくなりました。また振替用紙の通信欄は充分御利用下されて御用向を詳細お知らせ願ひます。何も記してないため當方から一々問合せしなくてはならぬものが澤山あります。

振替にて御送金の場合には金貳拾圓までが五錢です。



# 内面の世界に生きて

吉田 絃 二 郎

シドニイ港襲撃のわが特殊潜航艇の勇士たちの消息が報ぜられて来た。死生を超越した若い勇士の風貌はまことに神そのものを聯想せしめる。出發に際して、準備成るや軽い躰をかいて眠つてゐるその態度は、豪膽などといふ形容では當らない。大膽豪膽以上まことに神に幾い姿である。

昔の戦記物などに見出さるゝ半ば神話的、傳說的英雄をわたくしたちは今目前に現實の事象として、この眼をもつて見たのである。

この若い勇士たちはわたくしたちに生死を超越した人間の姿のいかに尊いかを教へてくれる。日本人全體がこの刹那生死を超越さへすれば、一切の苦難も苦患も無くなつてしまふことを諭してゐる。

戦さがつゞくにつれて、いろいろな不自由を覺悟しなければならぬが、一度生死を超越すれば不自由も不自由でなくなるであらう。

不自由といふことも絶対のものではない。みな比較的なことである。わたくしたちが小學校に通つたころは一週にたゞ一度清書をする時、半紙二枚をあたへられたのみであつた。別に不自由とは思はなかつた。

そのころは田舎には白砂糖といふものはなかつた。竹の皮に包んだ黒砂糖の一塊は尊いものであつた。しかも誰れも砂糖の不自由を歎つものはなかつた。

明恵上人は或る朝いつものやうに一椀の味噌汁を



取り上げられた。いつもとは異つた美味の汁であつた。そこには上人の側近者のひそかな心づかひが盛られてあるのであつた。

上人は壁の土を取つて椀の中に投げ込んでからふたたび箸を取られた。

日本人すべてが今日この刹那に大死一番して特殊潜航艇の勇士の心になれば敵の空襲も意とするには足らぬ。明恵上人の心になれば不自由も無くなるであらう。不自由も常の生活となる。足らはぬを足るですますところに庵の春はある。

武士は武士として生まれた日から死んでゐる筈である。この覺悟こそ敵要港部司令官グールド少將をして「潜航艇のシドニー攻撃で、戦死した日本勇士の葬儀を鄭重な海軍葬によつて行ふことにつき、余に對し國內に或る程度の批判が行はれてゐる。しかし余は敢て之を行ふ。……余はこれら日本の潜航艇乗員はこれらの名譽をうけるに十分の資格を有するものと思考するものである。」と言はせたのである。鬼神をも泣かしめるといふのはこのことである。しかし生死の覺悟は武人ひとりのものではない。

今は日本人一人残らず生死の覺悟に終死すべきである。われわれの一人一人が鬼神を哭かしむる底の仕事をしなければならぬ。

一日でも長く生きて隣人のために仕事をしなければならぬ。しかしこの刹那死に面しても狼狽せぬだけの心の置きどころを決めなければならぬ。よく生きてあることは、いざといふ場合よく死ななうがためである。もし一生の中、よく生きることができなかつたとしても、わたくしたちには猶ほ大事なことが一つ残されてゐる。それはよく死んで行くといふことである。従容として死んで行くといふことである。靜かに一切をまかせまつて死の國へ旅立つといふことである。

美しく生きることとは大切である。しかし美しく死んでゆくことはさらに大切である。武人は美しく死ぬために一生を賭けて武を練り、心を鍛へる。人は美しく死ぬために念々刻々の修行を積むのである。死ぬ、死ぬ、死ぬの一念に生きる時、哲學以上の世界が展けて來るであらう。

人間の理智を働かして見出す世界は限られたる世

界である。言葉で以て説かるゝ世界も限られたる世界である。理智と言葉以上の力は、死ぬ死ぬの覚悟にのみ潜んでゐる。理智が働く時眞理は影を隠す。言葉が発せらるゝ刹那眞理は沈黙する。眞に一文不知の愚に住する時眞理はわたくしたちのものとなる。

しかし一文不知の徒となることは容易なことではない。法然上人は幾度か一切經をくりかへして讀誦された。ソクラテスも萬卷の書を讀んだことであらう。上人は幾十年の修行の結果として一文不知の徒となられたのであり、ソクラテスも亦幾十年の哲學的思惟の後愚に住することを悟つたのである。易行門必ずしも易行ではない。居ながらにして高嶺の月を捉らへようとしてはならぬ。千里の道を歩いて後をはじめて最後の易行門が開かるのである。一日一日死ぬ覺悟を抱いて千里の道を歩くのが宗教的生活といふものであらう。

×

奥ゆかしいといふ言葉がある。

なかなか十年や二十年の教養では身に附かぬ人柄の品位である。三代五代の家庭的修養をさへ要する。

外國人には恐らく理解のできない言葉であらう。茶の湯にしても、作法にしても、生花にしても、舞にしても、書道畫道にしてもその主目的は奥ゆかしい人柄の教養にあると考へることが出来る。

一輪の花を壺に投げ込む。たゞ一碗の茶を啜る。この簡單な生活表現の裡にも無限の世界眞理の絶對界が在る。靜かにその深い世界に住して、たかぶらず、おごらざる心こそ奥ゆかしいものである。

織田信長が内大臣に任ぜられ京都に上つた時の話である。三好家の庖丁人に命じ、足利家第一等の饗膳を作らせた。信長はそれを食つて「こんなまづいものが食へるか」と大に腹を立て、庖丁人を放逐しようとした。庖丁人は何卒尙う一度庖丁を取らしてくれと懇願した結果ゆるされて、更に別の饗膳を調へた。信長は「こんなに美味い料理ができるではないか」と言つて、大満足で食べた。何ぞ知らん最初の料理こそ第一の料理で、二度目のは田舎料理であ

つて野人信長にはまことの味はあぢはへなかつたのである。一代の英雄にも奥ゆかしい心は缺けてゐた。惜しいことである。

×

人間の一生には偶然の幸運があり、不運がある。もし武田信玄をして尾張に生まれしめてゐたならば天下は信長に幸ひしなかつたかも知れない。成功のみを以てその人を論じてはならない。眞の人間のありがたさに生きてゆくことのできた人こそ第一の人といはなければならぬ。

路傍の一塊の石にも、一茎の雑草にも大きな自然のところが生きてをどつてゐることを直観するほどのこまやかな心に生きなければならぬ。まして一人の人間、一人の友人、一人の妻、子、親に對するこまやかな心を生かすことを忘れて何處に眞の生活や、宗教があらう。

人を掻き除けて生きようとする心は鬼畜の心である。一茎の草をも踏みにしつてはならぬ。

自分を外へ外へと押しひろげて行くのは外國人

の心である。自分を内へ内へと抑ゆるところに内面生活への根強い成長がある。眞の日本人の生き方がある。

人間の世界は狭い。

その狭い世界に人を掻き除けてまで生きる必要はない。

神佛の世界は廣く、無限である。わたくしたちはたゞ神佛を對手に生きつゞけるのみである。

×

膽力  
強化

小心恐怖症

法新正矯  
呈進明説



出来る新自宅矯正法が發表され大好評中「淨土讀者」と記入し至急ハガキ申込次第「内容説明書」無代進呈す

申込所

東京市神田区西ヶ原町三四六

瑞穂社研究所



法語  
感話

# 父を讃へた

## 近江商人

伊藤 宏天

ることも早いわけであります。  
お國自慢の題下に於て、私はよくこの實話を提供するのでありますが、確かに滋賀縣近江は大きな湖水と共に商人が自慢であります。廣く其の名を天下に及ぼして、東京大阪日拔きの場所

致しました。御一同も急いで歸られる必要も無く、あとは茶菓の御供養を受けて和やかな坐談の席となりました。

に……見榮を切るところであります  
が、其の家族を残した本宅の多いG郡のH町

其の時です。床の間の次の席に居られた方が急に坐り直して

Nと云ふ古い造酒屋さんのお座敷で、町内の御主人方が約三十名、今日で申せば常會です

「私の親父は偉い親父だつたと思ひます」  
息子が父親を褒めるのですから別段に悪いことでは無い。然し、俄かに改まつて何を云ひ出したのかと、一同は眞面目になつて其の人の顔を見る。見つめられて其の人は面はゆ

が、未だそんな約東も無い數年前の七月上旬のことでした。約三十名が道の集ひをされま

「イヤ、別段に錢儲けが上手であつたわけでは無い、學問が深かつたわけでは無いが、私

時局の波——統制、配給——に押されて、自覺無自覺もろともに、最も正しい道へ送り出されて居るのが、今日の日本の商人であらうと思ひます。數多い中の事ですから、未だに五里霧中でマゴツイて居るのがありもしようが、信ずるところあるものは強い。立ち直

した。豫約のままに私は二時間近くの法話を

の親父は偉い親父でした」

思ひ出の感に耐えざるものの如く、再び

「偉い親父」を繰り返して仕舞つた。一同は益々凝視する。一座注

視の中に其の人は、身振り豊かに

「私は若い時から、毎日、斯うし

て商ひに廻りましたもので」

と、大フロシキに包んだ荷を肩

にかけて、其の結び目を胸のこ

ろで兩手でかかえてゐる格好をし

て見せました。説明が少しくドイ

やうですが、お國自慢の瀬腸です。

幾らお店がビルデングに代り、ト

ラックやダットサンの爆音が近代

的だと申しても、私は矢張り、立

棒織の組織の木綿着物に小倉の角

帯をキリツと締め、紙の前垂をか

けて身構へた、昔の近江商人の硬

々しい姿を忘れ兼ねます。否、其

の容姿だけでは無い。其れに伴つたアノ剛健

な魂をです。同感の士の多いことを信しま



す。

坐りながらではあつたが、今、目の前に身

つたのですから耐りません。一同が笑顔で

「あんたは若い時から膝ぎ手であつた」

「町内中の評判者であつた」

「わし等よく親父から小言を食つて、あんた

を手本にせよ、あんたを見習へ」と云はれたも

んや」

など口々に云ひあひました。

「其う云はれてはキマリが悪いが、其うし

て、終日商ひに廻つて、夕方家へ歸ると、店

番をしてゐた親父が上り口まで出迎へて、

「今日は何うやつた」

と、其の日の成績を聞く。こちらは疲れて

はゐるし、足は塵だらけ、ものを云ふのも面

倒な位、懷中の手帳を放り出して

「今日は此れだけ賣つて來た」

と云つた切り、井戸端へ行つて足を洗はう

とする。すると親父は其の手帳を拾ひ上げ

「今日は此れだけ買つて貰うたのかい」

と云ふ。チョット耳障りではあつたが

「ウン」

と答へたまま足を洗つて這入つて來る。

又、翌日、夕方に戻ると

「今日は何うやつたい」

「これだけ賣つて来た」

同じく手帳を投げ出して井戸端へ。すると後で

「今日も是だけ買つて頂いたのかい」

と親父の聲がする。何うも耳障りである。

「お父つさん、導うぜ、お前のやうに店番をしてゐて、お客さんの方から買ひに來られたのなら、買つて貰うたと云ふも好きが、これ

この通り、わしが一日かかつて、わしが賣つて來たのやがな」

「いや、其れでも買つて頂いたと云ふものぢや」

斷定的に、威壓するやうに。

「勝手にせよ、この頑固親父め」

さすが、口には出さぬが心にきめて相手にせず、足を洗つて汗を拭く。

又、次の日である。夕方歸ると

「今日は何うやつたい」

其れ又始めやがつた。うるさい親父めと思ひ

つつ

「是だけ賣つて来た」

と例の通り。親父は相變らず手帳を頂いて、

「今日も此れだけ買つて頂いたのかい」

「ウルサイナーお父つさん、毎日々々、同じことやないかいナ。向ふから云ふたら『買つて貰うたん』で、こちらから云ふたら『賣つて來たん』で、疲れてゐるのに、毎日々々ワダ／＼云ひなさんな」

「イヤ一寸お待ち、同じことでは無い。其の云ひ廻し方で道が表と裏とに分れるのや。お前の氣には入るまいが、これからわしがたづねたら、『今日は此れだけ買つて頂いた』と云へるやうにしてお呉れ、でないと、わしが

御先祖に對して申しわけが無いでナ」

と、まるで御先祖のお位牌を前へ持ち出されたやうな形、當の親父には口答はしてゐるものの、御先祖のお位牌に向つて唾はきかける程の横着は出来ません。其れから後は全く氣に入らぬながらも妥協して、毎夕方には

「今日は何うやつたい」

「今日は此れだけ買つて貰うた」

出した手帳を頂いた親父は

「おかげさまやネ」

と拜んで居る。其の後、幾日たつたかハツキリしませんが、フト氣がついて見ると、今までウルサイ氣に投げ出してゐた帳面を、いつの間にか我と我手に靜かに差し出してゐる。

賣つて來たと云ふ時には、手柄さうに手帳を投げ出したものが、買つて貰うたと云ふ時には、われ知らず手帳を差し出してゐる。投げ出すのと差し出すのと、同じ出すことながら氣分が違ふ。頑固な親父と嘲しつゝ、たゞ先祖の手前で妥協した自分であつたが、今は何だか身に沁みるやうな氣がする。斯くて、親父の生存中、年月は流れましたが、偕て親の亡きあと店を繼いで、三年五年の今日この頃

シミ／＼と思ひ出すのは親父のこと、

別段、錢儲けが上手であつたわけでは無し學問が深かつたわけでも無いが、ここの道理が胸一ぱいにわかまへられて居た、私の親父は偉い親父だと思ひます」

と、長々との祖父隠談、されど聞きあきた人は誰もありませんでした。一座はシンと静まつて、庭前の向うから

漏れて来るのは蟬時雨ばかり、折しも七月の月上旬土用前数日のところ、而も午後の陽盛り、六疊と八疊の二間の座敷に三十人、むし暑がる可きこの席が、皆一様に袴元からお水でも注がれたやうな涼しさを感じて居りました。

更に其の人は言葉をついで

「若し、お前は親父から

何んな財産を譲られたかとお聞き下さるなら、私の相續した親の遺産は此

れだけで御座います。力の限り一日働いて、

おかげさまで今日も此れだけ買つて頂きまし

た、と、帳面が拜み頂ける、これが私の親譲りの財産で御座います」



これぞ我が家の護りとばかり、語尾を強めて自信深く云ひ切られました。私は眼がしら

の熱くうるむのを禁じ得ませんでした。お説教をしに行つた私は却つてよいお説教を聞かされたのでした。

爾來、これぞ近江のお國自慢、何處へ贈りものにしても、決して迷惑にはならぬと思ひ、度々、實地に話しもし、書きもしたことでありますが、全く尊い實話であります。今日でこそ高度國防國家、強力體制のもと、業態に大きな變化を生じて居りますが、其れでも歴史光榮ある近江商人の傳統精神に變りのある筈は御座いませぬ。

數多き近江商人の夫れ夫れに親から受け繼がれた財産を、お金に見換つて何百億か知らねども、其れと一緒に皆ともに、相續せられた遺産は、前に語られた通りのものであります。

近江の商人が此の姿なら近江の農夫も又同様、汗とあぶらに終日を働き通して鋤鋤を使ひ收めては、今日も又大みいのちに生かされた身の幸ひをよろこび、近江の勤め人も又同じく、おかげさまで大御業の一分を果させて

頂きましたと感謝する。斯うなつて来ると近江一國のお自慢では無くて、結局は皇國日本のお自慢であります。

近時、軍神の母と讀へらるるを代表として母を讀へた美談が、尊くも世に流布いたしました。私は其の時から、一つ位は父を讀へて呉れても良いのにと待ち望んで居りますが、未だに語られ無いやうでありますから、ここに一つ思ひ切つて御紹介申す次第で御座います。

話中、帳面を拜み頂くと申しましたが、其れは私共が身に着けるとき袈裟を頂き、讀むときお經を頂くのと同様、たと袈裟やお經が有難いから頂くのでは無く、袈裟を身に着けておつとめをすること、お經を讀むことを頂くのである通り、帳面の賣り上げ高を拜むのでは無く、高ふこと働くことを拜むのであります。

私自身、淨土の宗侶であり、念佛中心の修道者を以て任じて居りますから、終始一貫しておがむことを主張し、其の道のお傳へをす

るのでありますが、其のおがみの第一義を本當に解して頂けるのは、直接にはたらく人であることを頼母しく思ひます。

封建の制度は永らく、おがむこととはたらくことを分離したやうであり、今尚ほ、其の餘教は、おがみとはたらきとを合致させぬ嫌ひがありますけれども、私共の研究と所信とは、おがみとはたらきとを徹底した一致に導きます。

業務を國運とし、業務を人生とし、業務を如來とすることは、私共の研究と所信とに基づく綱領でありまして、若し夫れ、淨土宗侶として念佛を扱ふ時は則ち、尋常行儀の相であり、平生念佛のお言葉で御座います。

尋常とは何ぞや、平生とは何ぞや、諸君の實地に就いてお答へ下されば、至極明瞭であります。

私よく法話の席で申すことですが、皆さんの唯今の着物は一枚着替へたよそゆきであつて、平生のふだん着では無い筈、平生のふだん着はモウ少しお粗末でよごれて居りませ

う。顔つきだとして唯今の殊勝げなよそゆき顔で、何と云つても特別に粧つたところがあります。

其れこそふだん平生の顔つきは、頼みなくれて口がとがつて目がつり上つて……氣だて心持でも唯今のやうで年中通せるなら問題は御座いますまいに。すむのすまぬのと相當にいらだつのが私共の常平生の心の相で御座います。

然し、斯うした着物や顔つきや氣だてで平生の説明をしようと思ふと面倒ですが、其の平生を業務でお答へ下さるなら至極簡単であります。

「あなた、平生は？」

「ハイ、此の着ものはよそゆきで、此の顔つきも特別で………」

左様な面倒な答は要りません。

「ハイ、店をやつて居ります」

「あなた、ふだんは？」

「會社へ勤めて居ります」

「あなたは？」

「百姓で」

此れ位ハツキリした返事は無いと思ひます。

全く、我等の尋常を示し平生を教ふるものは業務であります。

諸君の尋常平生は即ち業務分掌の姿で盡きるのであります。

お互、仕事に勤めはたらくことが平生で、浄土の示すおがみの姿が念佛で、一緒に結んで平生念佛とは、南無阿彌陀佛と、おがみはたらくことで御座います。

例により、最後に、私が斯うした「法悦」を感じさせて頂いて居る御法語を、合掌の内に聲高きいたゞいて見ませう。

たとひ餘事をいとなむとも、念佛を申々これをするとおもひをなせ、餘事をしつゝ、念佛すとはおもうべからず

(勅修御傳第二十一、上人つねに仰せられける御詞の内)

念佛と餘事とどちらが先でも同じで無いかと云ひ度いところ、買うて貰ふたも賣つて來

たも同じで無い

かと云つて叱ら

れたのと好一對、其の云ひ方

一つで道が裏と表とに分れるのであります。

帳面を投げ出すのと差し出す

のとの違ひ位なら容易であります

すが、念佛と餘事との關係は宗

義上の大切な問題で、御法語の趣、よくよく

心得べきであります。

(齋藤

清畫)

## 笑話

### 大變な噓

櫻ん坊を食べた男が種子まで呑んだため、腹の中で芽が出て、だんだん育つて遂に頭のでつべんに見事な櫻の木が生えた。

やがて春になり爛漫たる櫻花は實に見事に咲いた。どうも頭の上を踏みつけられたり、酒の上の喧嘩があつたり、踊るはねるで煩さくて仕方がない。思案の末に、翌年は根こそぎ抜いて捨てゝしまつた。

スルトだ、何分大木のことゝて根を張つてゐた跡が凹地になつて水が溜り、魚がわいて、果ては釣にきたり泳ぎにくる者が次第に多

く到底その苦しさに堪へ切れず、色々と沈思の末に、とうとうその池に身を投げて死んでしまつた。

### ものしり

蓮根の切口を見た奥様が「まア、御器用に穴をお明けになつたこと」といへば、吹き出したのをデ

ット怵へて

「これは蓮根でござあますよ」

「ハテ、蓮根とは知つてをりますが……」

### 風呂の喧嘩

武士「亭主早く相手を出せ……」

亭主「もう誰も入つてゐません」

武士「ナニまだゐるはずだ」

といきなり裸になつて風呂に飛

び込んでから

武士「湯番、ざるをもつて來い」

## 隨筆

子

供

の

躰

石井俊瑞

(1)

「あの人は、もともとあゝいふ性質だから中々聴き入れませんよ」とか「あゝいふ性質の人だからとても氣を病みますよ」とか「あの人の仕兼ねるよ」なぞと、いかにもその人の性質を知り抜いて、その人のこれからの行ひなり、今までの所作をも豫測し見透すかのやうに言ふことがあるが、實際私達はお互に交際の裡に、行動の中から互の性質を見抜いておるものである。而もそれは一人一人異つて居り、型も濃さも同じと云ふことは斷じてない、顔の違つてゐるやうに全く十人十色である。

一體さう云ふ性質はどうして出来てきたのだらうかと言ふと、先祖から承け繼いだ稟質と、生れてから受ける色々様々な周囲の影響、そうしてそれ等がこんがらがつて發達して行く間に、段々出来上つて行つたものである。或學者は三角形になぞらへて居る。處が稟質環境と及び教育と言ふ三つの邊で出来て居るその三

角形は各邊がそれ／＼難多に伸び縮みさせられるのであるから、そこに種々様々な三角形が出来上るわけである。同じ両親から生れて、同じ家庭に育つた兄弟姉妹でもそれ／＼異つた性質を持ち合はして居り、違つた考へ方、行ひ方をする。近年雙生児の研究が盛んに行はれて居るが、これは唯近似する度が濃いか言ふことだけの事に過ぎぬ。濃いからと言つて遺傳とか稟質が何よりも偉大な力があるとは結論はされぬ。唯極端な場合にのみ通用する位のものだ。

とにかく、そんなわけであるからその人を取りまいてゐる周囲の事情が良いやうに、良い躰けであるやうにすることは絶対に肝要なことである。丁度祖先から承けたものは種子のやうなもので周囲は畑の土のやうなものである。この畑には良い肥料をやるか、やらんか、又枝の伸びる時手入れをするか曲つたなりに放つておくか、或は又暴風雨なぞで痛められるのを防いでやるか、あ

まり肥料をやり過ぎて葉だけを發達させて肝心の幹を、又實を太らさないか、とにかく伸さなければならぬ所はよく伸し、適当な肥料を適当な時に適量に施してやらねばならぬ。六ヶ敷いやうで六ヶ敷い事ではない。丁度百姓は誰にでも出来さうで出て来ないが然し氣をつけながらやれば別に六ヶ敷い事でもないと同じである。六ヶ敷く考へずに、一應の事柄だけを絶えず心に懷いておくことが必要である。

而もこの人の性質と言ふものは凡そから言つて青年期の頃に大體の傾向が固まりかけてくるものである。勿論人は一生多少の變化をしつゝ過ぎて行くものである事は云ふまでもない。それでこそ人は一生修養であり勉強であり鍛錬である筈だ。然しとりわけ子供時分は最も可塑性の強い時期で周囲の事情なり教育なりによつてどうにでもなる者だ(即ち環境影響の強い期)。處が大人になると性格も固り、生活目標も出来るから自分の性質で周囲を動かすことがある(環境適應と言ふ)。そんなわけでどちらから言つても子供時分の躰はとても重大な問題と言へやう。そこで本来から言へば親自身の行狀と言ふことが先づ必要なことではあるが、それは他日に譲るとして子供に與へる立場としての躰について事實を土臺として少し考へて見やう。

それも私が二十數年専門の立場から色々の人を調べてそれ等の

人達の子供時分どんな躰であつたか、あゝすることが必要ではなかつたかと言ふ事柄が澤山ある中から茲では二三拾つて見るにすぎぬ。

## (二)

第一に眞に宗教的な信仰雰圍氣の裡に養ふること。

これは必要論を述べれば足りる事柄ではあるが、今は事實に即して痛感してもらひ度いと考へる。

信仰心のあることは良きにつけ惡しきにつけ人生の危機の場面に於て最も鮮かに光を放つものであることは今更言ふまでもない彼の軍神加藤少將にしても死を賭しての幾十回の爆撃行のいかなる時にでも自若として而も情濃やかであられたのは篤信の家庭の人となられた事が一つの大きな力であつたと私は思ふ。又絶忠の士杉本中佐が禪の信仰に徹し、佛教の無我の極致たる死との合一不二の信仰境地に立つて居られたゝめにあの戦死の時にも死して猶立つて遠く

陛下に擧手の禮をして居られた所謂立亡の域に居られたので、御幼少時の篤信家庭に養をせられた事が少くとも一因であると私は云ひ度い。

眞に信仰の裡に育くみ養はれると言ふことは一生を左右する重要な素地となるのである。軍神その他偉い人のやうに積極的に君のため社會のためになる行動の發動的な原動力となると同時に、

又一時世の迷ひから悪い方面に陥り悪業をなす途端に於ても、その出鼻を挫いてくれるやうな抑制的威力を發揮してくれるものである。次の様な實例を擧げよう。詳細は略するが、元來性格上溫和な良質の某と云ふ人があつた。妻君に死別し子供を三人かゝへて四〇を過ぎて自由労働をして漸く糊口を凌いでおつた處が今のやうでない七、八年前のことであるから中々四〇過ぎては思ふ働きも出來ず、収入は途絶え勝ちであつた。處が子供が皆良く出來る、本人も行きたがる、下の子供も皆今にも學校でも退學さして何處か泰公に出さなければならぬ家の状態にも拘らず、學校へ通ふことを無性に喜んで居る。某は當時親の慈悲から自分は三度に二度に、二度を一度にして、その日のをやつと暮しておつたのである。然し如何に考へてもどうにもならぬ、フト僅かな動産保險を勸誘員に無理強いに勧められたまゝ掛けてゐたことを思ひ出し、或夜半空俵を狭い露路の間に長家のハメに燃え移るやうに置いて、さて火をつけ、燃え上り、多少板も焼け始めたが、急に某は恐しさに震へ、それをもみ消し、後始末もせず、そのまゝ家の中に飛んで入り子供等の傍に、まんじりともせず夜の明けるのを待ち子供を送り出すために炊事をやり前晩の跡を見るのも恐しかつたと言ふことである。兎に角それは未遂に終つたのであるが罪は罪である。處でその未遂に終らした深い動機は何であるか

## 二宮翁の叱正

櫻町陣屋下に二宮金次郎翁が住んでゐた。その時分に翁のところに出入をしてゐた疊屋で源吉といふ者があつた。この男は辯舌がよく廻り小才もきいて仲間ものからも嫌はれてなかつたのであるが、どうも酒がすきで僅かばかりのかせぎがあれば酒を飲むといふ風であつた。自然仕事も手につかず遊んでばかりゐた。こんな具合で、懷の中は年中火の車の貧乏暮しであつた。

ある年の暮、やはりさんざんに困つた擧句の源吉が翁のところに來て、

「正月になるといふのにお恥しい話ですが、つく餅がありませ

ん。申し譯ありませんがどうか餅米を少々お貸し下さいませんか……」

とたのみ込んだ。しばらくその男の顔をじつとみてゐた翁が「さて……」

と形をあらためて口を開いて

「お前は年中家業を怠つて少しも勤めやうともしない。錢さへあればすぐ酒を飲んでしまふ。それにも拘らず正月がくれば餅を食ふたいといふ。一年間動苦勉強して、せつせと丹精してゐる者と同じやうに、お前が正月に餅を食ふたいといふその心得からして、そもそも大きな間違

と考へるのだ。それは矢張某が田舎で育つ時分、父母が信心家で始終近所の寺へ伴れて行かれ、そこで住職から、色々佛の教へを聞き又とても可愛がつてもらひそのお住職の正しい行ひを常に見せられておつたと言ふ。それ等の印象が率然頭に浮んで来て、どうにも責められて仕方になかつたと言ふ述懐であつた。子供の時の映、印象程偉大なものはない。その某も青年壯年初老期へと恐らく生活に追はれて特別信心生活に入る餘裕も持てなかつたことだらうと思ふ。然るに過去の映がこの危機を大にせずに救つてくれたのである。某は罪を裁かれ實に清々しましたと如何にも満足氣に話しておつた。科學は——私も或る意味での科學者ではあるが——とかくそれは性格だ。小心で情意纖弱な者の思ひ詰つた揚句の果によくやる行動に過ぎぬ等と片付けたがる。然し決してそんなものではない。同じやうな性格者でも、かう云ふ映のあつた人となかつた人とは、まるでやつた行ひの仕方、その改めの心が違ふ。矢張これも前に私が調べた人達であるが思想的に誤つた方向に走つた二人の人を實例にとつて来る。私の見る所之の二人は稍同じやうな性格類型の人であつたが一人は富める度量衡商の息子であり、他は神主の息子であつた。二人共秀才として大學にまで學んだ。前者には勿論旦那寺があり家にも佛壇もあるが、父母も參詣した事はない。別に無信心でもないが、まあ商業にのみ没頭し、従つてその家庭生活も精神的な點が薄かつたことは想像

正月はこんど初めてきたといふわけではないのだぞ。米だとして偶然地からはえてきたわけでもないのだぞ。正月は三百六十日が明けたり暮れたりしてから來ることにきまつてゐる。米は春に耕し、夏に草をとり、秋に刈り入れてこそ初めて米となる。それをお前は春に耕さず夏に草もとらず秋に刈りもしないで、米がありませんといつても當り前のことではないか。されば正月になつたからとて餅が食べられる道理があるわけではないか。

いま餅米を貸してやつてもよいが、お前はそれを何うして返すつもりか。借りて返せないとなれば罪人となるぞ。若し正月になつて餅が食ひたいといふなら、今日只今から遊惰を改め、酒をやめなさい。そして山林に入つて落葉を掻き集めて肥料をつくり、春になつたら田を作つて米を得なさい。さうすれば來々年には餅が食べられる。だから今度の正月は己が過ちを悔ひ、餅を食べずにゐなさい。」と、懇々と源吉を説諭した。

さすがの源吉も一言の返事もなからずうなだれて聞いてゐたが、やがて顔をあげていふには「よく判りました。わたくしが悪るうござりました。わたくしのやうな家業もすて、酒ばかり飲んでゐるものが、年中仕事に骨を折つてをられる人と同じやうに餅を食べ春を迎へようと思つたのは全くの心得違ひでござります。この正月には餅のないのはわが身の錯と過ちを改め心を入れかへます。酒も止めま

に餘りである。

それに比べ、後者は神主として信仰も篤く町の人も尊敬してゐた父母の許に育ち、就學後も小學校の校長先生がとても信心家で神社佛閣の前では必ず一同に最敬禮さしたと云ふやうに、一事が萬事そんな具合であつたらしい。かけて加へて中學時分の國語の先生が熱烈な國粹主義の方であつたと言ふことである。とにかくさう云ふ雰圍氣の中に襲され育てられて來たが、不幸時流に染つて左傾したのである。さあこの二人は一方は中々轉向せなかつたが、他方は極めて滑らかに行動は勿論のこと思想の轉向をした。これは現在なら、誰しもこの國を擧げての戰爭に直關する限り轉向するのは當り前と怪しむ者もないが、この事實は支那事變より以前の事であるから、そこに何等かの素地としての或物を豫測せねばならぬ。勿論之れだけの記述では、直ぐに宗教的な襲に持つて行くことには無理を感じるであらう。然し詳しく色々な事を綜合するとどうしても私は幼少時青年期の襲の連ひであると斷ずる(深度心理學的見地から)。實に私は襲の偉大さを痛感するのである。かう言ふ事は別に私が一萬數千人の統計をとつたものから背ける事柄で眞の信仰生活正しい信仰的雰圍氣での襲け程、人に氣付かれずに而も絶大な威力を發揮するものは多い。總べての性格の曲りもこれによつて抑制せられるし、又良ければ伸ばされると言ふことの實證が一々私達を教へ續うつてくれる。(つづく)

す。春の二日からはずぐ家業にかかります。出来るだけの勉強をしまして、來々年の正月には人並に餅をついて祝ひたいと存じます。よく教へて下さいました。有難うござめます。それでは御免をこうむります。」

と、挨拶をのべてから、しほしはと門を出て行つた。翁の門人の中には、この様子をみてゐて「げんこうが一致ならねば年の暮疊重なるむねや苦しき」と狂歌を口ずさんでゐた。「げんこう」とは言行と源公とをにかけていつたものである。

この時、翁は手に金を握つてゐたのであつたが、源吉の後姿をじつと見送つてゐて源吉がいままさに門を出ようとすると、急にまた呼びとめた。

何の用かと急ぎ戻つてきた源吉にいつた。

「どうだ、わしのいつたことが腹にのみこめたか……」

「へえすつかり肝に銘じて判りましたでござめます。生涯とも忘れぬことではありません。お訓しの通り酒を止め、けん命になつて勉強いたします」

「さうか、よく判つてくれた」

こういつて翁は、手に握つてゐた金一兩を源吉に與へた。それから更に門人にいひつけて白米一俵、餅米一俵と、あり合せの大根や芋やその他のものを源吉に與へた。

それからといふものは源吉は生れ變つたやうになつて働き、近所の人々からも好かれて、立派に生涯を終つた。

## 會のたより

## 佐藤春夫先生の

## 嚴父遺稿「懷舊」

佐藤春夫先生は嚴父實德院鏡水  
豐仙居士の初盆を迎へ供養のため  
先般自筆遺稿「懷舊」をそのまま

## 特志寄附者芳名

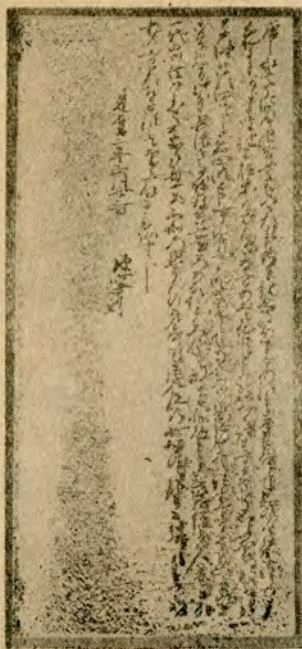
左記の通り本會資金にと特志寄  
附下されました。

金十圓也 京都府乙訓郡乙訓村

栗生 光明寺殿

因版にして、公けにされ各方面に  
贈られました。嚴父は薫雨山房主  
人と稱され、俳句と狂歌をよくな  
され隨筆を書いて獨特の味を持つ  
てをられました。版になつた「懷  
舊」は嚴父六十餘歳の際にものさ  
れたものであり、達筆で認められ  
てあります。その一節を御紹介し  
ませう……。

太陽曆——親族の佐藤南浦は亡  
父鏡村の門人で維新後大阪に居て



福田行設上人筆、一杓起請文、青森縣三戸町松尾十兵衛

時々通信もした。明治五年私が十  
一歳の時初めて郵便といふもので  
手紙が届いた。時は九月頃と思ふ  
義父がそれを讀むのを聞くと飛び  
たつほど嬉しい事がかいてある。

大要は

「從來用ゐ來り候大陰曆廢止に相  
成、西洋各國に行はれ候太陽曆に  
改正せられ候趣にて、當年は十一  
月三日が來年一月一日に相成從來  
の正月元旦同様新年を祝する事に  
相成、當大阪にては已に正月の準  
備致し居り候、御地方も其内右御  
達しに相成候事と奉存候云々」  
といふのである。子供心に正月を  
待ち兼ねて、まだ正月まで四月もあ  
ると思ふてゐたのが、十一月三日  
が元旦ぢや何といふ嬉しい事であ  
らう。私はこれを聞くと直ぐ家を  
飛び出して遊びづれに觸れ廻つた  
それは嘘ぢやといふものもあり、

又喜んで内へ知らず者もあり、小  
供仲間では大騒ぎであつた。私も  
其時の嬉しかつたのは戀女房と結  
婚した時よりもつと嬉しかつた。  
……とあります。

## 岩野喜久代女史

## 文化學院に出講

歌壇選者岩野喜久代女史は去る  
九月から文化學院女學部に招かれ  
短歌の講義を受持たれました。こ  
れは故與謝野晶子先生の後任者と  
して先生門下の逸材たる岩野女史  
が選ばれ、先生の講義をそのまま  
引繼いで同學院の短歌の指導をす  
ることゝなつたわけです。

◇身の不遇より一度は生きる希望  
さへ捨てた私が今は淨土の會員と  
して指導を受け、日を明るくし  
て更生してゐます。(山口、下村)



童 佛

話 典

# 黄 金 の 鹿

濱 野 義 光

昔印度の國の、ガンヂス河の上流の靜かな森の中に、世にも不思議な一匹の鹿が住んで居りました。そしてその姿は黄金色に輝いて目もまぶしい程でした。誰と云ふとなく、佛様のお使ひの鹿だと謂つて居りました。

或日の事でございます。黄金の鹿は、靜かな河岸の森の小道を歩いて居りました。すると、河の方から

「助けて呉れ！ 助けて呉れ！」

と云ふ、叫び聲が聞えて來ました。

丁度雨上りの、ガンヂス河は印度でも、名に負ふ大河です。其の流れに巻き込まれて、一本の丸太にしがみついて居た一人の旅人が、浮いたり沈んだりして河上から流れ來

ました。

けれども、山の奥のこと、誰もあたりに人が居りませんでした。

助けを求める聲は、段々に、小さくなつて、其の旅人が、まさに、命の綱の、丸太から手を離さうとした時に

「どぶ一ん……」

と河の中へ飛び込んだものがあります。其れは、見る目もまばゆひばかりの、黄金の色をした鹿でした。

濡れかゝつて居る旅人のそばへ泳ぎついた鹿は

「サア、早く私の背にお乗り下さい。そして角をしつかりとつかまへて居て下さい」

と云ひました。

旅人は、一生懸命、夢中で、鹿の背に、はひ上り、角へしつかりつかまりました。

黄金の鹿は、旅人を背負つたまゝ、河を渡つて、わけなく岸に上りました。

旅人は黄金の鹿に、命を助けられました。

「イヤ、鹿さん、有難うございます、お蔭様で、命が助かりました。本當にお禮の言葉もありません。有難うございます」

「イ、へ、私は其んなにお禮を云はれることはありません。ただ人様を助けることが出來て、私も嬉しいのです」

「それ所ではありません。本當にあなた様は、命の恩人です。御恩返しに、何んでも致

します。何うぞ、御つしやつて下さい。どう

をりました。

ぞお願ひ致します」

「お禮など決していりません」

黄金の鹿は、幾度も旅人の禮を  
ことばりました。

しかし、何うしても、旅人は聞  
きませんでした。

それで仕方がないので黄金の鹿  
は申しました。

「其れでは旅人さん、たつた一つ  
お願ひがあります」

「ハイハイ、何んでも聞きませう」  
「では、外でもありません。どう

ぞ、決して私の、居所を人に話さ  
ない事、これだけを、キツト約束  
して下さい」

「エ、其んな事はお安いこと、  
堅くお約束を守ります」

旅人は其う云つて、丁寧にお辭  
儀をしました。其うして首を上げますと、不

思議な事に、黄金の鹿の姿は見えなくなつて



x

其れから五年経ちました。

或日のこと、其の國の王様が不思議な夢を

ごらんになりました。王様は早速國中の大臣  
をお呼びになりました。

「王様！ 何んの御用で御座いますか」

「イヤ、外ではない。實は昨夜不思議な夢を  
見た」

「何んな夢で御座いますか」

「其れは、黄金色の鹿の皮を敷いて寝ると、  
百歳まで生きると云ふのだ」

「では其の鹿は……」

「其れがわからぬのだ。早速國中にふれを出  
して、黄金の鹿を探させよう。其のかはり、  
探したものは黄金百包やることにする」

さあ其のことが、國中に傳はりました。

「黄金色の鹿を探し出した者は、黄金百包下  
さるさうだ、そうすると、一夜にして、大盡  
さまだ」

國中の人が、一生懸命に辻々に立てられた  
大きな立札を眺め乍ら、寄ると、觸ると、こ

の話を持ち切りでございました。

「黄金百包——悪くないなあ」

人々はあちらこちらとけんめいになつて探

しました。しかしどうしても黄金の鹿はみつかりませんでした。

x

或日の事、一人の旅人が立札の前で獨りごとを云つて居りました。

「だが、わしはあの鹿に、命を助けられた恩があるし、其の場所も云はない約束をした。だが黄金百包だとナア」

旅人は考へました。

「鹿のありかを知つて居るのは自分だけだ。

でも命の恩人だ。だが黄金の山」

そう考へると旅人は段々怒が出て來ました。

「イヤ、約束はしたつて、たかど、畜生だ、黄金百包にかへられない」

到々旅人は決心しました。そうして王様へ恐る／＼申立てに參りました。

「お前は、確かに黄金の鹿の居所を知つて居るのだな」

「ハイハイ、ガンデス河の上流で御座います。」

私がキツト御案内いたします」

それから、其の旅人の案内で、王様は家來を大勢つれて、ガンデス河の上流へ向ひました。

「王様、この近くで御座います。アノ森の茂つた邊りの美しい河岸に確かに、黄金の鹿は住んで居ります」

案内をした旅人の言葉の終らない中に、其の森かげに、目もくらむ様な、黄色の光りを、陽に映し乍ら遊んで居る、黄金の鹿を、みつめました。

「黄金の鹿だ！ 黄金の鹿だ！」

それつ！と云ふと、大勢の家來は早速、其の黄金の鹿を取り巻きました。

x

しかし家來達は、其の黄金の鹿のそばまで行くと、目がまぶしくて、とても近よれずに、

唯、アレヨ／＼と眼をくばかりでした。旅人は大聲で叫びました。

「サア、早く其の鹿を、うち取れ／＼」

然し、餘りの黄金の光にうたれて、誰も近よれませんでした。

其の時に黄金の鹿は何を思つたか、バカバカ／＼と軽い足音をたて、王様の方へ走つて參りました。

「王様、私の命をおとりになる前に、是非一つ申し上げ度いことがあります」

「オ、お前は黄金の鹿だ、私に何の話しが

## 先づ國債だ！

群馬・館林 齋藤 仲 司



あるのだ」

「ハイ、王様、私はかつて一度、そこに居る



旅人を助けた事が御座います。この  
ガンデス河の水に溺れて居る旅人  
は、私に命の恩人だと申しました。  
其して、決して私の居る所を誰にも  
話さないで、いつまでも、こうで活  
せる様にしてやると約束しました。  
でも其の約束を破られて仕舞つた私  
は悲しいございます」  
王様は其のお話を、靜かに聞いて  
居られました。が、  
「ヨシ、お前の命は、助けてやらう。  
其の代り恩を忘れた旅人を、罰しな  
くてはならない」  
と云つて、王様は旅人を重く罰し  
ました。其れから、この國では、鹿  
を取つてはならない、定が出来まし  
た。  
鹿野苑と云ふ様に、鹿が澤山、印  
度の國で、仲よく遊んで居る姿が、  
其れから國中に、みられる様になりました。

# 野水 晶子 畫





# 座蒲團の教

吉 水 辨 道

陽あたりのいい庫裡の縁側の隅に、めいせんの座蒲團が一枚置き忘れてある、イヤ誰かを待っているのかも知れぬ。折檻の陽ざしを受けて思ふさま暖い光線を吸ひ、むく／＼と脹れ上つてゐる。

此の座蒲團がこの庫裡に奉仕してからモウ何年になるだらう、糸の切れた處や、綿のはみ出た點から觀察すると、かなりな年月を送つたものと思はれる。

随分いろ／＼な人達を乗せたことだらう。太つた人、瘦せた人、行儀のよい人、だらしのない人、……。

ある時は楚々たる佳人の座となつて、つましやかに名僧の信仰談を聞いたらう。ある時は元氣な青年に、些しく重壓を感じなが

ら、潑刺たる議論に思はず興奮したこともあるだらう。いやそんなことより、彼を座とする人々の中に、口と心との、あまりにも相異なるものゝ多いことに驚いたり、中には相當の身なりをしてゐるくせに、いかにも醜い根性の持主なのに、とんだ公憤を感じたり、そして其の度に彼を悲しみ嘆かせたことが、定めし多いことだつたらう。

人間は、恐らく誰一人この座蒲團がそんな祕密を知つてゐやうなぞと、思ふものはないだらう。だが飛んでもない——。

世の中のものゝ實は皆生きてゐる。死物だと考へたら大間違ひ、ことに人間の身につくものに至つては、本人の知らない間に、深い深い因縁がまつわりついてゐる。

衣類だつて、帽子だつて、下駄だつて——

木で造つた下駄が、バカな、といふかも知れぬ、だが決してさうでない。疑ふなら、長年穿いた下駄を出して見るがいゝ、其の減り具合、スレたり、禿げたりした様子、見る人が見ればたちどころに主人の性質を指摘するだらう。進んでは主人が健康か病身か、どんな病氣の所有者かさへ分るといふではないか。人間の家庭に、犬や猫が家族の内だと考へる人はあるが、着物だとか帽子だとか、乃至下駄までが家族の内だと考へる者はまあ無いかも知れぬ。

實はこれは人間の我まゝなのだ。

我まゝをつづけてよいわけはない、だから時々こらしめられてゐる。其のくせ尙眼が覺めないのが我まゝの淺ましい姿だ。

キチンと整頓された部屋へ入ると、生き生きとした感じに打たれる。帽子でも着物でも帯でも、座蒲團まで、皆其の處を得顔に生き生きしてゐる。之れに反して亂雑な部屋へ入ると、ものみな死んだ芥溜の感じがする。

法然上人は法爾の道理といふことをいはれた。谷は天にのぼり、水は低きに流れる。萬物其の處を得る姿で、眞に生きゆくものゝ様相である。世の中で一番健全なそして安定した形のことである。

笠置の解脫上人はこの姿を佛と拜まれて、食膳の野菜に向つて、大根如來人參佛といはれたことは有名な話である。

さて此の法爾の道理に一番遠いのが我まゝな人間の生活であらう。この邊の消息は此の座蒲團が一番よく通じてゐる。

よく知るものはよく愛す。人間の表裏によく通じてゐる座蒲團は又極めて人間びいきである。人間が悲しんでゐる時は、彼はいつも慰め顔に座を設けてくれる。人間が怒つてゐる時も亦彼はいつも靜かに呼びかけてくれる。まあ御座りなさい、腹を立てては駄目です、此處へ座つて腹を立てる代りに腰を立てることで、背骨がキチンと立つことは健康上何より必要なことです、腰を立てるのは其のためです、腹を立てたり怒つたりすること

ご存じてすか

恐るべき

## 蛔蟲の猛威

蛔蟲といふと餘りありふれたものであるため、とかく軽く考へ易いものである。そのためこの蟲を身體の中に大事に飼つてゐて平氣である人が案外に多いのには呆れる位である。醫者にいはせると、蛔蟲が人體に害を及ぼすことはチフス菌や赤痢菌、さては結核菌と少しも變らないといふことであるから、蛔蟲といつて軽く考へる人はとんだ間違ひをしてゐることとなる。これこそ盲蛇ものに怖じないたとへの通り、とんでもない失敗のもととなる。事實一匹二匹の蛔蟲で命を落す人がいくらでもあると聞いてはその害はおして知るべきであらう。コレラ菌、チフス菌が肉眼で見えないところから氣味悪い恐ろしい感じがするが、はつきり見られる蛔蟲を病原體とする蛔蟲病が法定傳染病から除外されてゐる

は不健康の證據です、と語つてくれる。

だがどこまでも我まゝな人間は、ナニをナマ生きた、と彼の言葉には耳ををかさない。

座るといふこと、静座といへば中々大したことで、ことに日本人にとつて正しく座るといふことの大事なことは今更にいふまでもあるまい。此の場合座蒲團の役目は實に並々でない。彼が全幅の使命を感じるのには恐らくこゝにいふ時だらう。

人間は生れると座蒲團の上へエンコすることを教へられ、年老いて愈々座蒲團とは切つても切れぬ間柄となり、一生涯彼の御世話になる。而も彼は踏まれても蹴られても黙々として忍従の一生を捧げてくれる。

人間の中にも、稀には一生涯人の膝下に伏して只黙々として縁の下の方持ちをつゞける偉人もある。さういふ人を乗せたら彼はさぞよろこぶことだらう。之れに反して、かへり見て何の値打ちもないのに、傲然としてあつて座蒲團に座して、恬として愧ぢない人間、さういふ人を乗せた彼は、定めし不愉快を感じ

ずることだらう。考へて見ると、イヤそんなことは全然考へても見ない人間の心は、淺ましいことだ。

×

今日の世界の大動亂の嵐の中に、いつか芽ぐんで来る力、さながら、踏まれてもむしろれてもいつか芽を出してゐるあの雜草のやうな力、それは此の座蒲團の上へ正しく乗る資格ある力だ。いひ換えれば、此のね強い忍従力の上にのみ芽ぐむ力である。

ヒヨロ／＼した根なし草や、徒らに頭ばかり飾つた雁來紅みたいな草は、嵐が吹けば忽ち倒れ飛んで了ふ。

風も雨も無い温室の中の世界と、強い力が颱風のやうに渦巻く世界とは、一切の様相が相異なる。この分り切つた事實が、我まゝな人間にだけ分らない。

嵐の中に立ち上る力、嵐の中に伸びる力、其のしつかと踏まへた脚下を見よ。其處に、蔚然として盛り上る力がある。それを忍従力

のが不思議であると或る學者がいつてゐる。

あんな蟲がと思ふのも無理はないが、三百十幾匹の蠅蟲が一致協力して四十二歳になる婦人の咽喉にがんばつたためその婦人は呼吸困難で死んでしまつた。まさに蟲に息の根をとめられたわけである。また二千幾つかの蟲のやつが腸の中で會合を催した。このためその病人は腸閉塞で倒れてしまつた。憎むべき蟲の猛威である。

胃の出口のところには肝臓、膽嚢、脾臓が口を開いて分泌物を出す。非常に大切なところである。

この賑やかな人體にとつての中樞部に、好んで蠅蟲が歩き廻るのである。そして何かの調子でこの蟲が一匹でもこれら分泌腺の一つにでも首をつゝ込まうものなら、それこそ人體はわけもなく重態に陥る。死後解剖してみると、これらの器官の中から一匹の蠅蟲が出てくる場合が多く、このために命を奪はれたかと思ふと諦めきれないものがある。

頭はない兒童が疫痢や腦膜炎と同じ状態で

といふのだ。そして其の座を忍從座といふのだ。

いつやむとも分らぬ嵐の中に立つて、今日ほど、此の嵐の中に伸びゆく力の必要な時はあるまい。そして更に其の母體となる忍從座の必要な時はあるまい。

Kさんの家には、何となく和やかな空氣があつて、知る人知らぬ人、皆がよるこんで和樂し、思はず時を過すのを常とする。郵便屋も旅の薬屋も、皆空腹を抱えながらKさんの家へ來て辨當を使ふのがおきまりだ。

眼に見えない座蒲團、忍從座があるからだ。

惱みつかれたもの、歩きくたびれたもの、其の人達は皆此の座によつて初めて憩ひ得るからだ。

凡そ座蒲團ならどこの家庭にもあるだらう。然し、身體に奉仕してくれる座と共に、心にも奉仕してくれる。此處のKさんの家の座蒲團のやうなのはさうガラにはないかも知れぬ。

此の庫裡の縁側にある座蒲團は果して何れぞ。

人間の心の惱みはやつぱり人間の心の忍從座でなくては休まぬ。同様に人間の忍從力に育まれてはじめて嵐を乗り切る強い人力が現れる。

恐らく、勇士と母との關係が其の邊の消息を語るものだらう。

長い奉仕生活の間に、主人も細君も子供らも、其のよい點、悪い癖、身體の秘密から心の隅まで、凡そ知りつくした座蒲團は、一家に於ける無言の指南役とでもいはうか、ことに此處の庫裡の座蒲團は、出入の人々が複雑多岐にわたるだけ一層豊富な内容が染み込んであるだらう。

古の聖人は鳥に説法したり草木と語つたりしたといふ。

近代に於てさへ靴や下駄の言葉を感じる人もあるとのことだ。もし此の座蒲團の忍從の教を聞くことが出來たら、さぞ、尊いものがあるだらうに……。

死亡する場合に、この蛔蟲の仕業であることが多く知つては後の悔みで臍をかまぬ用心が大切である。

小兒の腹痛、發熱、不氣嫌から寢小便、さては炭や鉛筆のしんをかじつたり、よだれを流すのも蛔蟲のためといはれてゐる。

ある男が宴會から歸つてきて、その夜のこゝと、たちまちにして全身に痙攣を起し、さてはてつきり食物に毒があつたのだと、早速警察の活躍となつた。がしかし醫者がこれを診斷して蛔蟲とにらみ手當をしたところ、矢張り犯人はこの蟲であつたことが判つたといふ笑へぬ事件もあつた。

とに角、醫師は蛔蟲を最も惡辣な病原體として注意をうながしてゐる。野菜の消毒、食事前の手の消毒が大切である。又若し少し變だと思つたら蟲下しを飲むとよい。特に子供には定期的に薬を與へてゐれば安心といふものである。

尤も根本的には、便所の改造であるのとこである。



若

い

父

一瀬直行

光三はおやと思つた。これはをかしいぞ。  
が、當の照子はころころと疊の上で遊んでゐた。三日程前から近くの小児科にかゝつて、軽い風邪と云ふ診断だつた。

照子は特に丈夫な子ではなかつたが、又弱くもなかつた。二ヶ月前に初めての誕生日を迎へて、すくすくと成長した。日ごとに可愛さが増していつた。

光三夫婦は照子が生れてからは、これまでと又少し違つた夫婦の道を歩いていつた。結

婚後四年になるが、子が無い。さうした夫婦生活のどうにも始末のつかぬ溝と云へば溝、退屈と云へば退屈につきあたつて、吐息をかされてゐた。

それが照子が生れてからと云ふもの、ちよつと想像も及ばなかつたやうな調子が、光三の生活の上に生じた。直ぐと彼らしい思ひつめた考へから、中途で仕事を投げたり、黒い色で生髪を塗りつぶしたりして、よく自分で自分を追ひつめてゐた。それが無くなつて、

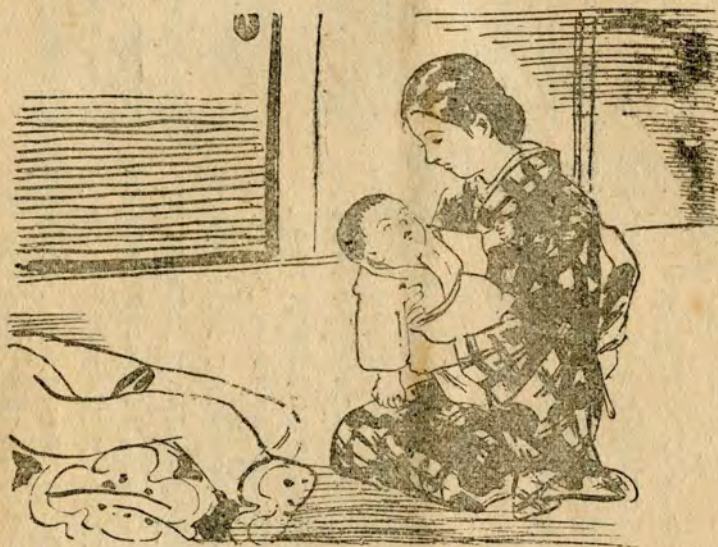
たしかに気分の上だけでも明るくなつた。  
が然し、光三は變な依怙地さから、たとへ子があつても無くても自分の思想や一生の仕事に變りはない。さう心の底に繰返した。それはさうに違ひないであらうが、今日彼はわが子を手ばなせない。たとへ妻とはなれても、生活から見はなされても、わが子だけは手ばなせない。さう不思議と云へば不思議、當然と云へば當然なことを思ひ浮かべ、くすぐられるやうな氣持になつた。

妻の清子はもう手ばなしに可愛くて、日ごと智慧付いてゆく照子の様子を見守り遠い將來のことに思ひをふくらませてゐた。

さうした思ひがけない照子の誕生は動きのとまつた夫婦生活に、大きな明るいお土産を持つて來た。その上、これまで缺けてゐた女としての清子に何か一枚加はつた。今まではあらはれずにゐたものが、照子の出生によつて、妻の心のうちに新しく芽を吹きだした。母になつたと云ふことが強く來て、體つきまでが變つて來た。

よく仕事に出かけてゐて、ぼんやり氣うとくなつてゐる時なぞ、うつかり照子のこと、が浮かび、あれこれと思ひわづらつてゐることがあり、何だこんなところ

へまで照子の奴とび込んで來てと、今更我にかへるのだつた。仕事に熱中してゐる時、日



もゐた。

又俄に父親となつてからは、人込みの中にあつても、又電車に乗つても、これまでは全く氣にもとめてゐなかつた、むしろうるさくさへ思つてゐた赤ん坊が急に目に付いて仕方がない。向うむきの若い母親の背に愛くるしい赤ん坊が彼の方でもみてゐたら、ついあやしてみたく無理に顔をしかめてみたりした。が、赤ん坊は笑つたためしがなく、急に周圍にきまり悪くなるが、我ながらをかしなものだつた。

「これは普通の風邪ではない。ことによるとツつかれたかな」

ふと隣の部屋で元氣に遊んでゐる照子の咳がどうも尋常ではない。と、一度したつきりであるが、妙に氣になつて、仕事に手がつかなくなつた。そのことを机に向つた儘妻にもきいてみたら、

「わたしもさう思つてゐたところ、どこかでうつつて來たのかもしれない」

やがて彼女は改めて照子を抱きかゝへてゐ

頃彼は家庭のことは忘れてゐ、さうつとめて

るらしく、とても元氣で少し、熱はないし：「し」と付け加へた。

「明日醫者へいつたら、よくきいてごらん」それつきり彼は照子のことを忘れてしまひ、日のくれとなつたが、又いやな咳が耳に入つた。素人にもそれとわかる息を強く引き込んだの咳だつた。

翌日、醫者から歸つて來た清子は、

「やつぱり百日咳ですつて！」

さう云つて抱きながら照子の顔を彼の方へ近よせたが、普段と少しも變らずにここにこして兩方の小さな手を振り上げてゐた。

こゝへ來て、照子は急にまるまるとよく肥えて、發育のさまも目に付く程だつた。それがこれからあの長い間にわたり、いたいけな體でせいで一ぱいに苦しまなければならぬのかと思ふと、彼もちよつとつらかつた。大抵の子は先づ一度はかゝる。たゞ輕くすめばよい。まだ生れてから間のない照子に最初襲つたこれも一つの試練であらう。苦しむ時には、うんと苦しんで、そしてうち勝たなければならぬ。

ばならない。

庭の芙蓉が今年初めて咲いた。むぎわら蛸蛤がとまつて、とび立つた。狭い庭に、花一つ、急にあたりが明るくなつた。今年はいつまでも暑さが續きさうだつた。

照子の病勢は日一日とはつきりして來た、病に峠があるなら、いよいよ登りにかゝつた。となると、清子は百日咳が流行つてゐること、今年のは悪性であること、どこそこの子がやつて、それが隣りの子にうつて、やつぱり照子にまで感染したことを繰返し嘆つた。そんな縁ごとを今更云つたところで仕方がない。それより輕く、一日も早く癒えるやうに心がけた方がよい。

この頃では流石にひどく咳込むので急にやつれてしまつた。おとろへるのが目に見えるやうだつた。が、案外當人は氣がしつかりして、なかなか床の上にはゐなかつた。もう朝かけ母を側からはなさないで、妻はつききりにしてゐた。

「どうした！」

## これは便利

### タンス

タンスを置くのに曲つたり一方にかしいだ所はいけません。永い間にタンスがゆがんできて、早く痛めることは勿論のこと、引出しの具合が悪くなります。

### 眠れぬ時には

床に入つてからもういつまでも眠れぬことがあります。こんな時は靜かに自分の息を數へてゐるか、佛様のお顔の目や耳、お口等を思ひ浮べてゐると眠られます。それでも眠られぬ時は、一度床から出てしまひ、深呼吸をして軽い體操をして腦に集つた血を散すと宜しいです。

### 縁側の掃除

縁側や柱をふいてツヤを出すには、ばけつの中に卵のカラを二、三個ほど入れて、その水でふくとツヤが出ます。



ぐつすり寝込んでゐた光三は、ふととび起きて、隣りの部屋に寝てゐる照子の側へいつてみた。はげしい咳がつゞげざまに出て、妻

はたゞおろおろとして、苦しんでゐる照子を抱きにし、困じ果てゐた。そんな晩がこゝろ三日續いてゐる。

まだ照子にはどこが痛いとか苦しいとか云つてうづつたへることが出来な、顔色を見たり泣き聲を聞きわけたりして、凡そ察してやるより仕方がない。これは親にかなはないことだつた。

いつか光三夫婦は子供の病氣にべつたりくつついてしまつて、そのことは氣付かずにさへゐた。わけても清子はひどかつた。照子と共に苦しみ、わが子と一緒に泣かんなばかりだつた。たゞ同じやうに咳込みこそしないが、照子とともどもやせてすつかり衰へてゐた。

「そんなに氣ばかりもんでゐないで、もう少し子供の病氣からはなれて、どうしてやつたら、先づ早くなほり一時でも樂になるか

を考へてやつたらどうだ！」

さう云つて彼は妻の愚かをよくさとした。つまりもつと無情に、それは却つて親の情を示すことになるのだが、病氣なら病氣の根をつきとめ、それに最善の方法を考へてやるべきだ。そんな子供と一緒に笑ひ、一緒に泣くなんて甘過ぎると叱つた。が、妻にすればそんなことわかりすぎる程知つてゐるが、さてとなると出来ない。相手をつゝばなしてみることが出来ないといふ。

夜床に入つてから餘計に咳込むやうだつた。寝作みたいにおこると、清子は急いで抱きおこした。と、母親の腕の中で照子はひゅつと息を吸ひ込んで咳込んだ。それが續くと一度深く吸ひ込んだ息がその儘潰れて、みるみる顔色が變つて、眼をつるし上げてしまつた。清子は夢中になつて、背を撫でたり軽く叩いたり、と、どうしても息が出来ない苦しみに身悶えするさまに、坐つてゐられず清子は抱いた儘立ち上つて、照子を手荒くゆすぶるやうにして部屋を歩き廻つた。

彼も驚いてとびおき、側から見るに見かねてゐるが、手のくだしやうがなく、思はず兩手を握りしめ、何とかそこでわが子が一と息付いてくれないものかと、もうそれは假死のさまから生きかへるのを待つやうな、一瞬のつらさだつた。そこでうましく呼吸が出来、又ぐつぐつと立てつづけに襲つて來、それにもうちかつて、どうやらさうした發作が速のくと、彼もやつと生きかへつたやうな思ひ、初めて苦しさから解放され、いつかあぶら汗をかいてしまふ。

さうした時、こんなやみ疲れた小さな體からどうしてこんな力が出るのかと不思議に思ふ程、照子は苦しさに全身をもつてもがいた。おとろへた腕をもつて清子をはらひのけ、うしろへのけぞつてあばれた。もうほんの一瞬、それは一呼吸の何分の一かの短い間、尙その儘であつたら、一とたまりもあるまい。恐らくことされてしまふ。そんなきりきりの所まで、最後の力をふるつて、いたいけな照子は病とくかひ抜いた。そして勝ち抜

けば、今まで背ざめた頼にかすかに赤みをさし、つるし上つた眼をしばたゝいて生氣をとりのどした。弱い、決して弱くない。もういが、決してもうろくもない。必死になつた生命の力のやうなものを、彼は感じた。

ふと眞夜中の二時をうつ時計の音を階下から聞いた。もう照子は床の中で、寢息を立ててゐた。光三は部屋にもどつたが、變に頭が冴えて、深いねむりに轉げ込みたいやうで寢付かれさうもなく、藏れた體をその儘机にもたせかけた。ぼたりと暗く重い深夜の氣配が身近に迫つて來た。どこからも物音一つ聞えて來ない。光三は煩雜な日常のことも、家族や生活のことも、大切な仕事のこと、將來や世の中のこと、總べてを忘れて、その時案外靜かに澄み渡り、ほかほかとあたゝかい所に滑りよつて、手のとよかない所をもさぐるやうに思ひをいたづらに走らせた。彼は早くに兩親と死別してゐた。丁度わが子のやうにあの年頃、そこに父母の愛情を探し求め、自分の時はどうであつたらう。既にさうした

ことは記憶の中から薄れてしまつてゐる程うまくなつた。それをもあつてはあんな風にと、一層なつかしく思はれる。兩親とわかれて既に二十幾年かは消え去つた。恐らく平凡な愛情の中に父は父らしく母は母らしくいつくしんだやうに思ふ。

かうしたことも普段はまるで忘れ、生活に追ひ廻されてゐるが、何かの時、ことあたらしく思ひ浮かべるのも亦嬉しい樂しさだつた。生きながら兩親に會へたやうな、初めて亡き肉身の呼吸がお互にあたゝかく通ひ合ふとその時、外にばさばさと云ふ音が聞えて雨戸をあけてみたら一匹の犬が庭先から逃げていつた薄い月光が縁先まで濡らしてゐた。雨戸を閉めて、再び床に入つた。いゝあんばいに照子は寢付いてゐる。やがて午前三時を打つ音、ふともしかして照子が死ぬんではないかと云ふ考へが浮かび、一應強く打ち消した。この時程、光三は自ら若い父を意識し、父としての情にむせんだことはなかつた。(鈴木金平畫)

## 歌壇

先師花久代運



小梅 平井 正念

亡き妻によむおん綴の聲みだれ木  
魚ばかりに終りぬるかな

評 亡妻供養のために綴を誦してゐたが、その中に悲しみがこみ上げて、聲がみだれ途にはよむことが出来なくなつて、涙を流しつゝ木魚のみ打つてゐたと云ふ人間の至情を歌つた佳作である。

東京市 丸山 四季

月光を便に稲を刈り終へて歸る野  
路に蟲の音ぞ鳴く

評 百姓はとり入れ時には朝も夜もない、日が暮れたからとてすぐ歸る怠り天が許さない。折からの月光をたよりにして豫定の稲を刈り終へた頃には夜も更けて、野は秋の蟲聲で満ちてしまつたと云ふ疲れの中にとり入れの歡びをも仄かにこめた歌である。

北海道 鈴木永太郎

「異状なし」點呼に答へかく云ふ  
は砲に全身破られし友

評 襟を正して肅然となる作である。軍病院で朝夕患者の點呼がある。異常はありませんしかう此の日答へた兵は「異常なし」ところか、砲彈の裂けたのを全身に受けて、全身不随とも云ふべき重傷者ではないか。併し傷兵は身の傷にたよまず莞爾として異常なしと高らかに昂然と呼んでゐるのである。

京都市 葉山 千高

戦へる國とも見えぬ安らぎや穂波  
ゆたかに秋の風吹く

大坂府 大村 惟一  
みたみわれ君にこたへん一鋸を銃  
にまけじと地にふるひて

津市 平松まさ子  
戦の進むにつれて夫子いづこへ  
だてて拜む十五夜の月

熊本縣 五野 一之  
天の川一すぢ白く大空に星みち渡  
る影ぞ涼しき

北海道 道鎮 茂靖

波高き陸奥の海原いくさぶね豊け  
き蝦夷の秋を護りぬ

満洲國 鶴岡 慈禮

宿營地眼に見えてより尙遠し重き  
あしあぐ今しばしとて

京都市 竹内 修吾

幾山河共に起き伏し戰友の遺骨を  
胸に入城の兵

愛知縣 戸松 勝美

萬葉の古へ人の歌二首をそら誦  
むかな熱なき今朝は

岩手縣 中村 てつ

色づけるぶだうの棚にさやく風秋  
めく朝となりにけるかな

大坂府 田中 生

友はみな戰の庭に出で立つにわれ  
悲しくも國に歸りぬ

兵庫縣 前川 孤舟

ソロモン的大海戦を臥してきく海  
兵われは涙にぬれて

茨城縣 眞木謙太郎

ソロモンの大き勝利に感激の胸高  
鳴りぬラヂオの前に

名古屋市 鷺津 耕順

よもすがら船べりたく波の音に  
誰が來つらんといくどめざめし

兵庫縣 永谷 良子

の小道に神農をかむ  
北海道 松山 正

感激の涙こぼしぬ煉乳を國のみ母  
の兵にたまひぬ

奈良縣 清水 我聞

一とせははやめぐり來ぬ兵の塚  
にも蟲のしげく鳴くらん

秋田市 小崎 蓮葉

天地の神の守りにこの年の二百十  
日の稲田うるはし

東京市 押野 尚秀

思ふさま手足のぼして寝入りたる  
無心の吾子の顔の可愛ゆさ

三重縣 青木 桂山

野村大使を迎へて  
大君のみことかしこみ一筋につく

北海道 花田 順往

世の中もかくあれかしと秋晴れに  
紺碧の海遠く眺むる

神奈川縣 和田谷みえ子

この秋にみくにに盡すすべなくて  
弱き吾身のかなしかりけり

## 投稿規定

はがきに一回二首以内とし「淨土」編輯部歌壇係あて住所氏名明記の上送ること



# 皇道教と方便教

(問)

佛教は勿論、いやしくも日本にある宗教は悉く天皇歸一を教ゆるものと存じます。而して大東亞圈内な世界人類悉く天皇に歸一するこそ最後の大理想でありませう。

畏れながら今この大理想に導く教を皇道教(假稱)とするならば、今日の諸宗教はそれに至る方便教となりはせないでせうか。従つてお念佛も皇道教に歸入さすべき方便であり、天皇に歸一し奉らん爲に存在する方便教と考へられますが如何でせう。

(福井・坂井・新保・淨土子)

(答)

現代日本人として當然考へなければならぬ疑問であり、且つ解決して置かなければならぬことであります。然しながら、天皇に關する限り帝國臣民としては慎重に言あげすべきであつて、之を輕々に

論ずることは不謹慎の恐れをまぬかれませんと云つて唯だ徒らに世の非難に恐れをなして成るべく痛いものに觸らないやうな敬遠主義を取ることもいけないことと思ひます。各宗教共に夫々の教義の中に護國的と申しますか、若しくは翼賛的と申しますか、皇道に近いものを發見しようとして研究と努力とをつゞけて居る實情であります。然しながら元來我が國の佛教は聖德太子以來皇道を翼賛する意味に於いて採用されて來たものでありまして佛教それ自體を普及せんとする爲ではありませんでした。聖德太子の三經義疏が明らかに之れを物語つて居ります。然しその後の佛教を通觀いたしますと、奈良朝時代の六宗は支那佛教の移植であつて護國教的立場に居たのであります。即ち皇室の覺召に依つて保護され且つ従つて護國の役目を課せられたのであります。ところが段々個人的な弊害が

出て來ましたので、その古い體をそのまゝ奈良の古都に残して、都を平安に移し天台眞言の二宗を採用して鎮護國家の祈りをさせたのでした。だが之れも根が支那的のものですから止むなく祈禱萬能のやうになつてしまつて漸く功利主義的弊害を生じて來ました。そしてそれは遂に日枝神社の神興や春日神社の神木がそれ／＼山法師奈良法師にかつがれて朝廷に強訴したり、他宗自宗互ひに争つて燒討をしかけたり横暴の限りを極めましたので、かの双六のさいと加茂川の水と共に意のままにならぬ三幅對の隨一と言はれることほど、非翼賛的態度に顛落してしまつたのでした。

この宗教暗黒時代に出現すべくして出現したのが法然上人の淨土教でありました。今までの傍から守護すると云ふ立場を清算して、日本的共

## 康 辨 村 中 當 擔

(迎 歡 問 質)



生應の理念としての理想的國家觀並にその生活理想を宣明したのでした。つまり聖徳太子以來明らかになるべくして明らかに得なかつたものが、茲に六七百年の長年月を經過して漸くに明らかになつたのであります。

然しながら悲しいことにはその時代は武家權頭時代で、公家の無能無氣力に武家が取つて代つて、其間多少の曲折はあつたけれども結局封建制度が確立する端緒を開いた時代であつたから、その時代に適應する「禪」が隆盛になり淨土教は事毎に彈壓を受けましたので逆に個人救済教の如きものに歪曲されてその國家性を第二義的なものに押し込められ宗義にもそれが力説されずむしろ不鮮明の状態にしてしまつたのであります。若しそれが闡明されれば幕府は存続の理由を失ふからであります。

他の宗旨には鎮護國家だの興禪護國だの王法爲本だの立正安國だのと云ふやうな言葉があり

ますが、それはその宗々の信仰なり教義なりが直接國家と結びついて居ないからであります。して、その教を遵奉すればおのづから國が安泰になるとか、或はその教に基く祈禱をすれば國が鎮まり國が護られるとか云ふやうな外的庇護の力としてのみ許される宗教でしたから、貴君の仰せの通り 天皇歸一への「方便教」か、又はその地位さへ疑はれるものもあると思ひます。かの本地垂迹説の如き「佛本神迹」の立場に立つて居たからで、更に降つては「神本佛末」となつても關係があるからどうかこうか命脈があつたのであります。要するに「外來教」の域を脱し切れないものであります。

そこに行くとなら然上人の教の中には殊更なるお言葉はありません。教義そのものが日本國體主義に立脚して居るからそんな必要はなかつたのであります。されば第二祖の鎮西上人は

人  
「弟子辨阿彌陀佛は故法然上人よりかくの如く種々に念佛の法門を受け傳へて候なり。」

日本國の一切の人々を助け奉らんが爲に、年七旬に成りて、最後の化導と存じてわななくく注し置き候なり」

と言つて居られます。天台教義の「圓融」思想の如きは清濁合せて吞んで何でも取り入れそこに選擇がありません。信仰らしいものはあ性を見出し得ません。信仰らしいものはあつても群雄割據のやうな状態か、又は交善神教のやうな有様で、純粹な信仰とは云へないのであります。また假りに歸一的状態があつても功利的なものであります。息災延命が大體の主眼ですから是亦た信仰とは縁遠いものです。かゝるものは是非共祈禱中心の護國教を標榜しなければ立ち行かなかつたに相違ありません。此の意味から見て貴君の言はるゝ皇道教の前提としての方便教よりも、も一つ前のものと云ふべきであります。

然るに念佛の教こそは「天皇教」ではないかも知れませんが、純然たる「皇道教」なのであります。若し「天皇」を中心とする宗教があるならば色々な支障が生じて來ます。



抽象的なすめらみこと教としてならばよろしいが、具體的には利己的要求に對してその解決を如何にすべきか、恐らく困るものが出来るであらませう。私達人間の慾求が國家目的の以外のものを絕對に持たないと云ふならば格別ですが、さもない限り信仰の對象としては困るものがあるのであります。

天皇歸一の考へは必ずしも宗教上の信仰と

## ちがつた信仰と友人の冥福

(問) 私の友人は軍屬で某方面へ派遣されて居りましたが戦死いたしました

たので過日弔問に参りました。そこは日蓮宗でした。私は自分の習慣上うつかり「南無阿彌陀佛」と唱へてその冥福を祈りました。然し氣がついて見ると何と云ふのが正しいのか分らなくなりました。その家の宗

限定しなくともよいと思ひます。古へのスメル文化が民族理念として統治被統治體制を形成したやうに、世界全人類の文化理念として成立し得るのであります。そしてその理念の抽象的の最高標準として「念佛教」があり得るのであります。

私達の見るところではあなたの仰せられるやうな方便教と云ふものはまだないと思ひます。それを具體的に申し上げるとよいのですが、色々と宗教的に障りが出て來ますから遠慮させて戴きます。

旨に従つて「南無妙法蓮華經」を唱へるのが友人の冥福を祈ることになるのか、やはり自分の信仰のまゝに「南無阿彌陀佛」を唱へるのがよいのか、私には心にもない題目は唱へられなかつたのですが、と云つて氣がついて見ると、どうも聲を出して念佛を唱へるのは變手古で、ツイだまつてしま

ひました。どう心得たならばよろしいか御指導下さいまし。(愛知 N 市、O 町、困惑生)

## (答)

宗教と云ふものを一列に並べて同等のものと考えたる人ならばどちらでもよいと云ふことになります。圓融無碍を説く天台や無我等を主張する禪宗などは、恐らくその立場を取るでせう。だから日蓮宗の人が淨土宗の家に來て南無阿彌陀佛を唱へ、淨土宗の人が日蓮宗へ來て南無妙法蓮華經を唱へてもよいではないかと云ふ議論もなりたちませうし、また富士山への途が、大宮口、御殿場口、須走口、吉田口に分れて居ても同じく頂上に行けるやうに「分け登るふもの」と云ふは多けれど同じ高嶺の月を見るかな」と云ふ歌が、よく引用されて「皆な同じだ」とする説も古來からあるわけであります。然し或る一二の宗派の人は自分の主張をまげず、何處までも他を嫌ふ建前を取ります。

この「何れも同じである」と云ふ考へ方は思想だけであつて信仰ではありませんし、またいたづらに他を毛嫌ひして自己にのみ執着



するのもししい信仰とは言はれませんが、かう云ふ排他でもなく、またデモクラチックにいづれをも同等と見るのでもなく、一切を統攝する立場に立つ信仰こそ最も正しいものと思ひますが、これに依る限り一を堅持して居て然かも一切を包容して居るのであります。

其上、宗教に限らず一切のものは永遠に生きなくてはなりません。されば永遠不滅のものこそ本當のものであつて、この歴史性こそ價值判の批評標準であります。随つて宗教に「無量壽」を説かないものはありません。「永遠」とか「久遠」とか「不死」とか「大有」とか云ふ言葉は皆なそれであります。しかしその中心本尊をはつきり「無量壽」と云つて居るのは淨土教だけであります。

現在日本に行はれて居る佛教諸宗派の中で天台宗は久遠實成、釋迦牟尼佛、華嚴宗は廣遮那佛

眞言宗は摩訶毘盧舍那佛、禪宗は現實の釋迦牟尼佛、日蓮宗は久遠實成の釋迦本佛が説いたとする法華經を本尊として居ります。そして淨土宗、眞宗、時宗等の本尊は均しく無量壽佛であります。

即ち端的に無量壽を示す淨土教示の本尊が最高價值を持つものであります。阿彌陀佛が最尊第一でありその光明は諸佛にまさつて居て、諸佛の及ぶ能はざるものと言はれて居るやうに、一切の諸佛は阿彌陀佛に包容されて居りますから「彌陀は諸佛の母」と云ふことが出来るわけであります。決して諸佛を毛嫌ひするのではなく、それ／＼その徳を尊敬し讃嘆して然かも彌陀に統一されるものであります。

この意味から毛嫌ひとか自己主張とか云ふのでなく、一切を包容して居る意味に於いて何の宗派の家に行つても「南無阿彌陀佛」を唱へていいと思ひます。

然し非常に排他的なところへ行つても無理に毛嫌ひすることを強行する必要もないと思

ひますから、その場合は敢へて口に出さなくてもよいではなうでせうか。先方の人の信仰が「南無妙法蓮華經」だから、題目を唱へなくては、冥福を祈ることにならぬと考へるのは、むしろ個々人の上に立つものであつて本當ではないと思ひます。

その上自己の信仰が天台流の圓融普門になつてしまつて「阿彌陀」の信仰になれないで居ることもありません。つまりは一切を無量に見るものが本當の阿彌陀信仰であり、その「日常化」であります。

御實ねのやうな場合は黙つて口の中で念佛しながら瞑目合掌するくらゐのところではうね。

法然上人の御法話の中にも

「世の嫌嫌をはぐかる」

と云ふに言葉があります。

無理押しをしても、逆效果を來たす恐れがあつたら、そこはよろしく調節すべきであります。

# 道場

漫更協同作



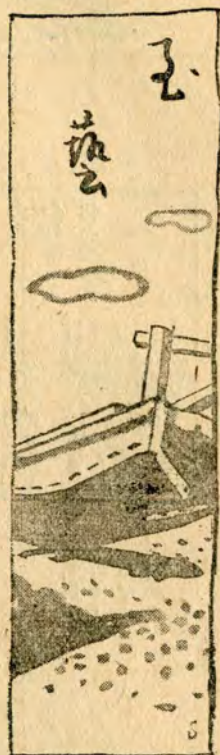
おと

浪土まんが

緑

成





# 劍法の奥義

劍道教士 林 東 軌

宮本武蔵がある日のこと主君の細川侯といろいろな話をしてゐた。その時フト細川侯が武蔵にわが家中で誰が上手であるのか、と質ねた。するとこれに答へて、

「いま玄關で、一人恐ろしい者をみた」

といつた。武蔵ほどのものが恐ろしいといふのであるから堂々たる武藝の達人であるに

相異なる。早速呼び出すことになった。ところが玄關には達人である等と云はれてゐる者

は一人もゐなかつた。それで結局武蔵が自分で呼んでこようと立つて行つたが、やがて都甲太兵衛を連れてもどつてきた。そして武蔵が太兵衛に問うた。

「平生、どういふ覺悟をしてゐるのか」

「何うも覺悟などと特にいふやうなものを持つてゐません」

「いやいや、さう云はずによく考へてみるがよい」

「左様、さう仰せられると二、三年前までは己が生死について色々平生から考へてゐたが、この頃は一向に考へなくなつてしまつた。それはいつでも死ぬ、といふ覺悟が出来たからでせう。まあこれが覺悟といへば平生の覺悟でせうか」

「イヤ、それこそ劍法の極意であるのだ」と武蔵がいつた。

自分が生きてゐることは勿論のこと、死ぬことすら少しも考へてゐないのが普通の人間である。劍をとつての修業にも生きるとか死ぬとかばかりを考へてゐる内は未だ十分でない。ほんとの達人になるとこの生死の問題をよく味つて、更にそこから抜け出ていつでも死ねる境地にまで行つてゐるのである。

劍をとつて敵に向へば、勿論相手を殺すためなのであらうが、この際に自分だけは生きるといふ考へが頭にあるやうでは達人の劍にはなり得ないのである。この境地を最も明瞭に教へてゐる人に無住心劍の針ヶ谷夕雲といふ劍客がある。この人は別に學問のあつた人

ではないが、劍を磨んでその極意に達し、自然と達人の境地に到達した人である。この夕雲の劍法といふのは、たゞ一手しかない。眞向から斬り下すだけの劍法である。しかも相手を必ず倒すかはりに自分も死ぬといふ相打ちをその極意としてゐる。彼の教へにこういふ言葉がある。

「刀を抜く時には三つしかない。一つは戰場に於てとあつて敵に倒されて死んでも恥にならぬから何のやうに働いても宜しい。今一つの場合は主の命によつて人を斬る時である。この時は自分が斬られても對手さへ殺せば、立派に命を果してゐる。次に第三の場合は人から喧嘩をしかけて退引ならぬ時である。この時には對手を殺す代りに自分も助からうとしてはならぬ。

即ちこの三つの場合は何れも對手を殺す代りに自分も死ぬばそれでいい。人だけ殺して自分だけは助からうとするからいろいろの迷ひが生じてくる。だから自分の流儀は相打ちを極意にしてゐる。對手も殺す、その代り自

分も助からうとは思はぬ。従つて、眞向の太刀一つあれば十分だ」

この夕雲の極意の一太刀に對して破り得るだけのものがあつたであらうか。生も死もない必ず對手を倒すこの劍法こそ達人の境地である。すでに對手の劍は眼中にないのである。少しでも動けば必殺の一閃が早くも頭上にきてゐるのである。これに較べれば對手の隙につけ入らうとするが如き劍法は末の末といふことになる。

こういった境地について語つて餘りないものに雲弘流の師口景雲の記した自讃の言葉がある。景雲は自分の像の描かれてゐるのに讀をして曰く、

「汝を顧みるに、形は人に似て、目に見ることなく、耳に聞くことなく、鼻に嗅ぐことなく、口にいふことなく、本より七情の氣もなく、唯茫然として立ちぬ。そも汝の名はいかに、

有とすれば無し、無とすればある世の中の月だにうとき夜半の影法師」

ここまでくると劍法はそのまゝ佛教の三昧の境地と同じことになつてくる。佛教では三法印の一つとして無我が根本になつてゐる。

無我とは申すまでもなく我にとらはれないことであるが、さればと云つてまた無我にとらはれてはならないと誡めてゐる。色は即ち空であり、空は即ち色である。こういった考へ方は東洋獨特のものであつて歐米人には理解したくもとても出来ない相談のものらしい。

だからこそ彼等は佛教のことや、または東洋のことを何かしら不思議なもの、不可思議なもの、頭から決めてゐるのである。彼等の頭の中は、自分たちのなすこと考へることが一番正しくて尊いといふことしか考へることが出来ない仕組になつてゐるので、この點も仕方がないかも知れない。

しかしわが國獨特の劍法の奥義といふものは當然この東洋精神の極地にまでこないではゐなかつたのである。太刀を振り廻してなるべく多くの人を斬るだけが劍法でなかつた。従つて如何に技の修練をして上達しても、た

だそれだけでは達人になれなかつた。達人には更に精神的に修行を遂げた者でなくてはなれなかつたのである。

針ヶ谷々雲の弟子の小田切一雲の言葉に、この間の心境についてよく現はされてゐるものがある。即ちそれは

「凡そ心の極め、天命を知るとなればたとへ、天地が忽ち微塵となるとも、聊か變動するの氣自己にあるべからず……僅かに三百、四百石の知行分限の沙汰にさへ怒心を動かして、兼て所持せる輩は、義を忘る……面々に己が赤子の時と歸り見れば、天地の破裂するとも目もまじろがず、天下を得ても悦とせず、一切世間有爲諸欲、一箇も赤子の心には感ぜざる……然れども、飢えては乳をのみ、飽きては離れ、乳の出ぬのは押し出し、今日の用に事缺かざるほどの、眞知の働きは自由に備はりてあるなら、こゝを主一無適といひ、純一無類ともいふべし、敬といへねど敬なり、誠と知らねど誠なり、放心と嫌ふべき物なく、閑思、離慮と忌むべきやうなく、

もとより不遍、不倚なれば過不及もなく、不惑、不信、不義、不度といふべきものなし」とある。これが劍を學ぶ人たちに教へる言葉なのかとおかしく思ふ程、これはもはやすでに宗教、哲學の部門に入つてゐるやうに思はれる。宗教といつても教祖が十字架にかゝつて處刑されたといふ事實をなんとか理論ずけて人類全部の罪を教祖一人が持ち去つてくれたのだと、それも大變な苦勞をして決めたしまつたやうな宗教ではない。また哲學といつても、せめては自分が物を認めるといふ事實だけでも、ほんとのものだと思ひたいわけでもないまでもただそれだけのことにとりついて、結局誰にも判らぬ言葉を發明してしまつた哲學とは違ふ。あくまでも東洋は東洋らしく、色は空に異ならず空は色に異ならずといふ根本精神にたちあつてゐるのである。「いざ！」とかけ聲もろとも二尺何寸かの一刀を構へれば、すでにそこには敵もなければ己れもない、表もなければ裏もない。

劍聖といはれた上泉信綱に面白い話がある。或る悪人が子供を人質に捕へて小屋の中にかくれてしまつた。人々がこれを捕へやうとすると子供を殺さうになるので手を出し兼ねた。人々はどうしても子供が心配でこの悪人を捕へることが出来なかつた。丁度そこへ信綱が通りかゝつて、この話を聞くと何を思つてかすぐ寺から袈裟をかりて、自分は頭を剃り落した。そして手に握り飯をもつてその小屋に入つた。そして握り飯の一つを悪人に、一つを子供に與へた。悪人がその握り飯を手を受けようとした隙に難なく悪人を捕へてしまつた。僅か一人の悪人を劍聖ともいはれる人が剃髪してまでのことがあるまいと可笑しく思ふかも知れぬが、これこそ達人の境地であらう。

塚原卜傳が猛り立つた浪人をそれでは望みの通りに勝負をするからと一足さきに船から洲の上へ下ろし、自分は船頭の持つ櫂を握つて思ひきり岸を押したので船は浪人を洲に置き去りにしたまゝ離れてしまつた。この無手勝流も矢張り同じ達人の心境である。

俳

壇

太田耳動子選



東京 清水金鈴子

炎帝のすさびの花に夾竹桃

評 眞夏の炎天の下に咲く夾竹桃をつつく跳めてゐた作者は、之を太陽の愛寵する花と斷じたのである。中七字に苦心がある。

室戸岬 横山 素堂

召集を待ちつゝ後の二日灸

評 二日灸は舊曆の二月二日、後の灸は同じく八月二日に點ずる灸のことをいふ。作者の覺悟の程も察しられて頼母し

名古屋 鶴田 稱眞

ころ／＼と鳴く蟋蟀に心すむ

評 中七字までは如何にも平明で、平凡に近いが、下五字の實感に依り救はれて餘りがある。

岩國市 長岡 白朝

水を打ち終へし處に人來る

越中 内山 覺阿

蟲の音にふさわしき夜となりにけり

浦和 瀧川 信雄

むさしのの秋を告げけり蟲の聲

名古屋 堀場 典雄

鉦叩あはれ夜長を刻みけり

京都市 拜郷 賢三

夕顔の残り香にふ秋の蟲

東京 坂口 光雄

夕月を伏せて散りくる桐一葉

青森市 高松正覺坊

稻雀羽音こぼして飛び去れる

名古屋 鷺津 耕順

打水の溜りに雀浴びてゐる

京都市 近藤 進

月にぬれ落坂山を京に出づ

小樽市 狩野 海陽

どこことなく入り来る風に秋立てる

名古屋 熊澤 秀國

青森縣 辻村千禧子

さわ／＼とさ／＼やく風も秋の夜

兵庫縣 山本多可子

夏草に大いなる風浪うてり

小樽 平井 正念

寒逝きて廊下冷たし足袋の裏

野本村 杉浦 文治

蟬の聲静き我が身の午寝かな

名古屋 江崎 孝融

うら盆會今日より三日父もゐる

京都市 永田 七郎

暑さよう／＼秋の花咲き初む

名古屋 大淵 青歩

灰一塊落ちし机に秋を知る

東京 石柳 風子

秋日させば御堂の香のゆらぎ行く

北海道 花田 順往

霜がれとなりし野菊の咲きつゞく

新潟縣 中村 一靜

遠くきくおけさの笛や旅の秋

廣島市外 山口勇治

雇はれて棚經あげる僧なりし

鳥山町 大輪 清

葉鶏頭離の榆葉へ眞赤なる

東京 内田 光江

愚院の父をむかへて月今宵

北海道 前野 賢一

朝顔のたわみしほめる白雨かな

愛知縣 吉永 清晃

短夜の山門の内御する

京都府 乾 仁一

あす討たむ敵を枕の月見かな

吉野 上野 恭雲

山巒に時雨雲垂れそぼの花

満洲國 鶴岡 慈禮

朝焼けの雲に進軍起しけり

開原街 八十 茂

高粱の垂穂の下に徑のあり

富山縣 佐伯 光安

柴賣の脊にめづらしや蟲の聲

大阪府 三木 繁雄

蟲鳴くや銀河はづれて眉毛月

岸和田市 井坂桂三

とり／＼に咲く朝顔の垣根かな

茨城縣 眞木謙太郎

霧かゝる岨路あぶなし蟲の聲

東京市 渡邊 一念

蟲の音や宵月つゝむ曇うすし

官製は次き一回二句以内とし住所氏名明記投稿規定の上「淨土」編輯部俳壇採あてに送ること

# 淨土宗の鍊成要項

これまで淨土宗の中に少、青年

## 信條

會や婦人會等が幾つも組織されてゐたが、今度これらを全部統合していづれも淨土宗報國會の中に含まれることになつた。そこで報國會の方でも各會が自分々々でいろいろ違つた方法で鍊成を行つてゐるものを、矢張り一様に統一することにして、淨土宗報國隊鍊成要項をつくり、これからみなこの要項に従つて鍊成を實施することとなつた。ここで報國隊といふのは

一、我等は皇國臣民なり、華國の理想を奉體し、天業の翼賛に精進せん

一、我等は皇國佛教徒なり、利他の大志を發願し、萬國共榮に挺身せん

一、我等は皇國淨土宗徒なり、念佛の信行を策勵し、人生の歸趣を成就せん

一、我等は皇國淨土宗徒なり、念佛の信行を策勵し、人生の歸趣を成就せん

## 報國訓

### 第一 國體の精華

萬世一系の天皇を戴き、皇德八紘を掩ふ天壤無窮の國體に育くまると、我等皇國臣民は、祖孫克く忠烈の魂を紹ぎ、親子克く孝順の心を承け、協心戮力、偏へに御秘威

の六合に治わからむことを念じ、慈々國體の尊嚴を仰ぎ、承詔必謹の赤誠を捧げ益々その精華を顯揚すべし。

### 第二 三寶の恭敬

聖德憲章は三寶を以て四生の終歸萬國の極宗と讀す。則ち佛寶は覺醒の根源、法寶は眞生の規範、僧寶は大和の中樞なり。宜しく篤敬三寶の聖旨を遵奉し、枉れるを直くし、醇厚中正、以て皇國佛教徒たるの本分に精勵すべし。

### 第三 念佛の信仰

無量壽佛の大悲を仰ぎ、六八超世の本願に乗じ、三心四修、專心に念佛をばけみ、出でては恭儉服業、臣道の實踐に努め、入りては歸命仰信、悠久の壽光に生き、死生を超越し、知恩報恩、以て皇國淨土宗徒たるの使命を達成すべし。

## 宣誓

我等淨土宗報國隊員は國體ノ本義ニ則リ、佛祖照鑑ノ下、信條ヲ恪遵シ、以テ臣道實踐ニ精進センコトヲ期ス

## 鍊成道場清規

- 一、篤敬三寶、報答四恩之事
- 一、敬上慈下、大衆和合之事
- 一、身口意業、内外清淨之事
- 一、所作一切、隨順指南之事
- 一、求道精進、不惜身命之事

## 報國隊班別編成法

- 一、時宜に依り地方別、年齡別、職務別、性別、或は希望目的に依り班を編成し、別に一奉仕班を設くるを便とす。
- 一、一班の人員は五名以上十名以内を標準とし、二班以上を以て一隊を組織す。

## 鍊成道場作法の一部

## 食事作法

## 報國隊鍊成要項の一部

## (一) 宗侶鍊成には宗定法要集食

作法第二式を用ふ

## (二) 信徒鍊成の場合

(食前) 御稜威の下 吾今幸にこ

の淨き食をうく つゝしみてあ

めつちのめぐみを思ひ 品の多

少を擇ばじ。十念 頂きます

(食後) 吾今この淨き食を終りて

心ゆたかに力身にみつ 願くは

この心身をさゝげて おのが業

にいそしみ 誓つて御恩にむく

い奉らむ 十念 ご馳走さま

## 起臥作法

## (一) 就寢作業

合圖に依り寢具上に正坐、點呼、

同唱十念、「おやすみなさい」

## (二) 起床作法

合圖に依り、起床、正坐點呼、

同唱十念「おはやう」寢具整頓

## 報國隊鍊成指導方針

## 指導方針

一、指導員は卒先躬行以て垂範す

ること

二、鍊成は堅忍持久の涵養、體位

向上、作業力の充實を圖るべく

心身を鍊磨すること。

三、凡そ鍊成は苦行に走らず樂行

に偏らず、歡喜奉行以て共同動

作をなすやう指導すること。

四、大衆和合、常に淨土的偕和を

醸成せしむること。

五、指導講師の人格識見を中心に

鍊成せしむること。

## 思想信念

一、國體觀と淨土觀とに就て充分

なる認識を持ち、淨土の信仰が

眞に國民の生活を指導し、我が

無窮の國運を翼賛し奉るものな

りとの信念を把握せしむること

二、聖德太子の十七條憲法を奉戴

し、三寶興隆の眞意を體得して

歴代の御詔勅と淨土の信仰に依

り、國民教化に對する任務を目

覺せしむること。

三、徒らに己が意見を主張するこ

となく、無我奉公の精神を鍊成

せしむること。

四、念佛の信仰に依て初めて道義

生活を完うし得ることを理解せ

しむること。

五、度生の大願を樹て、物心一如

の思想に徹し、廣く淨土の信を

世界に希求することこそ、八紘

爲宇の理想實現を期するものな

ると共に、これ我等の使命なる

ことを認知せしむること。

## 生活實踐

一、寢ることの鍊成。

よく眠ることに依りよく醒め得

ることを知り、眠りを充分にな

すやう鍊成すること。

二、起きることの鍊成。

正しく起きることに依つて今日

一日の業務を完うし得るが故に

生活の第一歩を正しくすべく、

醒めることの鍊成をなすこと。

三、拜むことの鍊成。

今日も亦健康にて働き得ること

は四恩の賜なりと信知し、知恩

報恩敬神崇佛の習慣を養ふこと

四、食べる時の鍊成。

食の來處を思ひ、味の好惡、品

の多少を論ぜず、感謝の念を以

て咀嚼を充分にし、靜肅に食す

るやう鍊成すること

五、働くことの鍊成。

心身何れの仕事にても念佛の中

に營み、如何なる任務も之を輕

んぜず、刻々の時間こそ己が尊

き生命なることを體驗するやう

鍊成すること。

六、行住坐臥所作一切に互り、佛

作佛行たるやう鍊成すること



法爾  
自然の

# 死生觀及び宗教觀

法然上人法語解説(その十一)……

中村 辨 康

## 法 語

法爾の道理と云ふことあり。ほのほは空にのぼり、水はくだりさまになる。菓子の中にすぎ物ありあまきものあり。これらはみな法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は、名號をもて罪惡の衆生をみちびかんと誓ひたまひたれば、たと一方向に念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にて疑ひなし。(法語抄五四「念佛問答篇」勸導 廿一)

念佛には甚深の義といふことなし。念佛申すものはかならず往生すと知るばかりなり。

念佛申すには全く別の様なし。たと申せば極樂に生きたり知りて心をいたし申せばまいるなり。

(法語抄六二、六三、勸導廿、廿一、念佛問答篇)

## 解 説

法爾自然と云ふことは「道理」とは申しても謂ゆる合理主義とは違ひます。謂ゆる合理主義は有我的米英的思想です。理窟をこねてそれが理窟に合へばよいが、もし合はなければ取るに足らぬとして歴史をも無視し國民理想をも無視して顧みないものです。然かもその理窟は自由主義、個人主義に立脚して居るのであつて、大體「最大多數の最大幸福を要求する」と云ふやうな多數決で決定するものですから毫に危険千萬であります。つまりめくら千人の世の中であつて賢者は少く愚者は多いのですから、多數の愚者の賛成するやうな説は大體に於て愚説であり、多數の賛成は必ずしも眞正とは言はれないのであります。

この故に物事の正しさの決定は、單なる理窟に合ふことを以て標準としてはならないのでありまして、永遠性即ち歴史性の如何が極めて大切でなければなりません。言葉を変へて言へば法爾自然の道理が一番大切な決定標準なのであります。火はあつく水はつめたくほのぼほは上にのぼり水は下に流れる。是れ法爾自然の事實でありますが、それは永遠無窮にかはらない眞理であり正義であるところの歴史性を有する道理であり、そこにそのものの尊さがあるのであります。

果物の味ひは決して人工ではありません。蜜柑も甘くすく、葡萄も甘くすいから結局同じ味かと云ふに決して同じではありません。マンゴスチンと蜜柑とは餘程似かよつた味でありまして言葉では何とも云へない熱帯國と溫帶國との複雑した差が感覺の上に法爾自然の道理としてハツキリ味へるのであります。

この「法爾自然」の事實は決して人工を以て換へることは出来ないものであり、且つさうしてはならないものであります。さればその道理に人々が隨順すればその利用となり厚生となりますが、違逆すれば色々な災害を受けなければなりません。

今まこの法語に阿彌陀佛の本願が亦た法爾の道理であると言つて居りますのは、本願なるものが宇宙の最も根本的な法爾の道理を表現したものだからであります。何となれば「願」とは意志であります、その意志は法藏菩薩と云ふ一個人のものではなく宇宙の全體を代表して居るものであり、特に全人類の最高理想を現はしたものであります。それは勝手な欲望ではなくして無量壽無量光を具有する生粋な宇宙的意志なのであります。それは元來現はるべくしてしかも實際には現はれにくい有り得難いものなのであります。たゞ／＼現はれても何かが足りなかつたり餘分な付屬物が附いて居たりして居ります。それは宗教的には「諸佛の別願」として發表されて居るものであります。そして藥師十二願に見るやうに、或は釋迦の五百願に見るやうに、決して全宇宙的意志を代表するものとは受取られ得ないのであります。されば全宇宙意志は永いあひだ藏された状態のまゝであつたのです。然しこの法藏の状態はやがて何時か法顯されるやうに自然の力が蓄積され鬱血され遂に法顯されねばならぬのであります。そしてそれはやがて具體的な顯現となり「願成就」と云ふ結果を生じます。これ誠に法爾自然の作用であつて、決して人工的人意的なもの

のではないであります。

然かもその表現は「心身土」の三を離れてはあり得ませんし、心身土の姿に表はれるのが亦た自然なこともあります。

即ち彌陀の四十八願の成就は

|   |                            |
|---|----------------------------|
| 心 | 大慈悲                        |
| 身 | 無量壽<br>無量光<br>諸上善人<br>俱會一處 |
| 土 | 極樂淨土                       |

でありまして、心の外に身なく土なく、身の外に心なく土なく、土の外に身なく心なく、心身土は一如であります。之を衆生と佛との生佛關係から云へば、共同態社會態國家態たる淨土が重視されるのは當然であります。即ち佛からは我が家に引き取らうとするのであり、衆生の方からは親の慈悲心の中に包まれたいと望む筈なのであります。これは好むと好まざるとに拘はらず互ひに相牽引しなければならぬ自然の理なのであります。人のあるところ國家を形成するのは當然ですが、その國家は作られたる國家でなく、自然に修理固成された理想國家でなくてはなりません。日本的に言へば「神ながらの國」でなくてはならないのであ

ります。我が國の如き陛下と國家と國民とが一體となつて一君萬民、一億一心の誠を以て結合しつゝ何んな力を以て之を破らうとしても決して破れることなく、却つてさうした外力の壓迫が加はれば加はるほどその團結力はいよいよ固くますます高まるばかりであります。これは合理であるとか不合理であるとかの論議の外に立つた歴史的事實なのであります。だからこそ自然法爾なのであります。

今ま彌陀の淨土この自然も法爾の現はるべくして現はれたのであります。阿彌陀佛よりの誓願は

「最低の標準に依つてその國の人たる資格を獲得せしめる」ことであり、またこちらの十方衆生としては

「仰せのまゝに」歸命し隨順するだけのことであつて、畢竟水の低きにつくが如き自然的歸趣なのであります。

また日本人たるの資格が日本人を父母として生れ出るとか、または本人の希望に依り或る手續を経て國籍を移したかに依つてそれが決定しますやうに、何等かのけじめに依つて今まで非淨土的な人であつた私達を淨土に入國せしむべき資格ありと定められて居ります。

しかもそのけじめは特殊な不自然なものであつてはなりません。子が親を慕ふ感情のやうに法爾自然の感情から流

露する簡單なことをその條件として居らねばならないのであります。即ち「甚深の義」を立てないで「口業」の南無阿彌陀佛と唱ふところの如來の御名を呼ぶことだけで、即ち親子の感情を呼び起すことだけで「入國の條件」として居るのであります。

この「名を呼ばば必ず至る」と云ふ佛の來迎は、是れ極めて自然法爾の道理でありまして、それを何か特別のことのやうに思ふのは思ふ人の謬想であります。世には「來迎不來迎論」と云ふやうな論義がありまして「平生業成」であるから「來迎を要せず」とか或は臨終來迎なし」とかと申す議論があります。宗我の上に立つて論すれば理窟は立てやうですから色々な議論もなり立ちませうが、今更色眼鏡を借りて眺める必要はないと思ひます。公平に眺めて「來迎を要せず」の論は信の上に立つてのことですから一應許してもよろしいが「來迎なし」と云ふ「不來迎論」はむしろ不自然な議論であります。元來「來迎」とは「呼ばば答へる」と云ふことであつて特別なものではないのであります。「茶碗」と云へば茶碗が私達の頭の中に顯現するそれが「茶碗來迎」であります。如來様の御名を呼ばば如來様が私達の腦裡に來現し玉ふのは「信」の事實であつて

決して不自然でもなく特殊なことでありません。茶碗と呼んで茶碗が思へないのは茶碗を知らないからであり、名だけで實が伴はないからであります。それと同じやうに如來の名を呼び奉つて如來の意識來現のないのは如來への信がまだ不完全だからであります。母の名を呼んで母を憶想し得ないやうな子供はあり得ません。そんな認識不足の子はあり得ませんやうに、如來を欣慕する赤子の感情からは誠に粗雑な信仰と云はねばならないのであります。師の法然上人でさへ「佛の來迎は法爾の道理にて疑ひなし」と言つて居られるのですから、師匠の言を犯してまでも不自然なる不來迎を強調するのは師を師として立てゝ居ないそいりをまぬかれません。師匠の信仰が不自然な誤つたものならそれもまた止むを得ないことでせうが、自然法爾の道理とまでハッキリ明言して居られる「來迎」を否定しやうとするのはするものの謬見に外なりません。それと云ふのも天台流の成佛主義、此土得證主義を採用してからであります。師匠の捨て去つた支那思想を再び取り上げたところに謬りがあるのであります。之と云ふのも聖道門からの壓迫が強く「反法然」思想が大きな力を以て押し寄せて來た

からであり且つ封建思想がその頃の社會情勢であつたからでありまして誠に止むを得なかつたのであります。だからと云つてそんなことを今日まで固執する必要はありません。よきを探り惡しきを捨てたらよいのであります。そこに選擇性もあるわけであり、養正性も働くものであります。誠に「念佛申すには別の様なし」であります。つまり素直が第一であります。ですからつまらないところに腰かけてそこに何時までも固執して居て動かないやうでは信仰ではなくして執着であります。

誠に法爾自然の理と云ふものは實際の事實であつて理窟ではありません。理窟なしに「承詔必謹」の言葉のやうに素直に法爾の理に従ひさへすればよいのであります。念佛の信仰に甚深の義を考へる必要はありません。申せば生る。それでよいのであります。しかもそれは自然に理想國體の理念を體得することが出来るものであります。

特に現在の民情は昨年の大東亞戰爭勃發以來國民の「死生觀」が一變してしまいました。個人主義的の死生觀は解消されて八紘爲宇的新世界觀に依る死生觀がうまれて來たのであります。

舊來の死生觀は自分をどうするかを先決問題としました

が、今では自分の未完成は問題ではなくなつて、此の未完成な不完全なものでもその身心を捧げることに依つてより大なる大生命へ寄與することが出来るならば満足であり喜びであります。最小なるものを以て最大なるものを一層價值あらしめ得るならばその喜びは生命以上でありますから我が死の如きは決して悲しみでも苦しみでもないのであります。是れ從來の成佛主義的の死生觀は地に墮ちて往生主義的の死生觀が認識されて來たのであります。

正しく往生主義的の宗教信仰こそ大東亞戰爭下の現段階に於いて最も必要な最もふさはしい信仰であると云はねばなりません。それは既に七百年の昔、法然上人が我が日本に於いては成佛流の宗教は正しくなく往生主義の信仰こそ日本人に最も適するものであるとの見きはめをつけられたのであり、上人の立教開宗に依つて成佛主義的の聖道門はスツカリ解消されなければならなかつたのに、鎌倉幕府以來日本としては脇へ寄り道した爲に却つて淨土門の發達が阻害されて今日に及んだのであります。

大東亞戰爭を迎へること半歳、漸くにして淨土門的の死生觀の再確認をなし得る時節の到來したことは私達に取つて無上の喜びであり幸福であらねばなりません。

## 編輯後記

◇ある會合の席上で某氏がきかんに「島國根性」について攻撃してゐました。狭い本土にながらう他と交渉を断つてきたので知らぬ間に出来たものでせうが、悪い根性と分つてゐながら、仲を取り去れないところがあります。

◇盆栽は趣味として高尚なものです。盆栽のやうに小さくまとまつた人間をみるのは愉快であります。岩や木なら曲つた形の面白さは美しいものですが、人間の曲つた根性は困りものです。大したことでないものが頭の中には素直に入らぬ者があつた。

◇政治にしても國民が先づ信用しなくては仕事が出来ません。以前東京の湖風邸に行くとき何處かの新聞記者が大臣の演説や方針を攻撃してゐるのに出逢つたものですが、ただ嫌をけなして愉快がつてゐる

人が今でもゐないと云へません。

◇こんな人達がよく外國のことを有難がつたものです。所が米英の自由主義は、彼等が他の國民に銃剣をつきつけておいてから唱へてゐたものです。彼等の海外侵略史をみればはつきり分ります。

◇支那人が自分の國の公國に「支那人と犬は入園お断り」の札をはられて、よく平氣でゐたものと一驚します。同じ東洋人としてわれわれだとして憤慨してゐましたが、蔣政権が未だこの侮蔑に氣がつかないのだから嫌になります。

◇アフリカ人の首に繩をつけ手枷足枷をつけて人間の賣買をしたりオーストラリア人を「土人狩り」と稱して殺し絶つた彼等です。彼等は黑人を人間扱いにしないのだと聞くにつけ、われわれは彼等こそ人間らしくないと思はぬわけにゆきません。

◇皇軍の戦果は比類なきものです。

が、これで戦争が可成り進行したやうに思ふものがあつたら、大きな誤りです。戦ひはこれからです。物や人が足りなくなればなる程われわれの心の中には一億一心の固めが強くなるやう感ぜられます。古歌に「憂きことの箇の上に積れかし限りある身の力ためさん」とある通り、ますます奮起してゆきませう。

◇これからの生活の基は信念であります。信仰であります。例へば山奥に獨りで暮してゐてもお念佛の生活者は悪いことが出来ません。お國のためといふことを忘れることが出来ません。お國を少しでもよくしようといふのが欣求淨土の人たちの心です。

◇古田絃二郎先生は大變御多忙の様子です。御指導の程感謝します。◇石井俊瑞氏から「子供の戦」を頂きました。書きたい事は幾らでもあると申されてゐました。村瀬

## 淨土 十一月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和七年十月二十日印刷納本  
昭和七年十一月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號印刷會館

編輯兼發行人 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號印刷會館

印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區區部七(東京市)

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區區部二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鎌仰會

東京市芝區芝公園十五號印刷會館

郵政東京八二一八七番

## 「淨土」購讀規定

一 部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢  
一ヶ年 (送料共)

腦の病・神経系統諸症・神経痛  
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

# 綜合的優秀藥

# 光明丸

## 主治効能

腦神経系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症  
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺(ヒキ)、兒麻痺(ツケ)、兒麻痺(ツケ)、兒麻痺(ツケ)  
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、  
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、(肩首コリ)  
神経性(耳病)、神経性(鼻病)、記憶力減退、  
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一  
切、神経性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂  
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症  
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節  
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

| 價 藥 |    |    |    |
|-----|----|----|----|
| 六   | 十  | 廿  | 卅  |
| 日   | 日  | 日  | 日  |
| 分貳  | 分參 | 分五 | 分七 |
| 圓   | 圓  | 圓  | 圓  |

全國有名藥  
店、一流百  
貨店ニアリ  
品切ノ節ハ  
直接本舖へ  
御注文下さ

試供藥と  
説明書を

進呈

京都伏見いなり山  
謹製領藥元 願 成 閣

代理店 全國一流賣藥卸賣會社

淨 土 第八卷 第十一號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)  
昭和十七年十月廿日印刷刷本、昭和十七年十一月一日發行

定價金十二錢 (送料別)  
外埠定價金十三錢